

山極総長の言葉 式辞、挨拶より

「京大広報」No.704 2014年10月 4266～4271頁

自由の学風と活力ある京都大学を目指して

この度、第26代京都大学総長に任命されました。大変な重責であると感じを新たにするとともに、伝統ある京都大学を世界の舞台へ牽引すべく、時代を画す新しい仕事をしたいと考えております。

21世紀に入って、大学を取り巻く状況は急速に変化しました。大学の法人化、運営費交付金の削減と競争的資金の拡充、ガバナンスの強化と組織の構造改革、産官学連携体制の推進と国際的競争力の強化など、各大学はそのミッションを明確にし、それを達成するために迅速な改革を要請されています。第2期中期目標・中期計画も終わりが近づき、その改革を加速する期間にある現在、京都大学がいかにかこれまでの改革を促進し、どのような第3期中期目標と中期計画を立てるか問われています。総合大学として、研究型大学として、京都大学がどう発展すべきか、短期に達成できる目標を持つだけでなく、100年を超える視野を持って臨むべきでしょう。そこで、私は新執行部が進むべき道標と、達成すべき目標について私の考えを述べたいと思います。

京都大学の基本理念と改革の目的

1897年の建学以来、京都大学が掲げてきた基本理念は揺らぎません。日本で2番目に設立された京都帝国大学は、政治の中枢から距離を置き、自由な発想による多様な研究の場として、古くから日本文化の中心であった京都にその拠点を置きました。初代総長の木下廣次は、「自重自敬」、「自得自発」を本学の守るべき精神として説き、それは現在に至るまで自学自習に基づく自由の学風として受け継がれています。本学がこれまでに多くの独創性に満ちた学問領域を切り開き、ノーベル賞をはじめとする世界に冠たる賞の受賞者を数多く輩出してきたのも、この建学の精神が息づいてきた結果であると思います。今後もこの精神に基づき、自由の学風と創造的な学問の育成を目指して歩んでいく所存です。

一方、この100年で世界の情勢は驚くほど変貌を遂

げました。第二次世界大戦に至る数々の戦争を経て、日本は新しい憲法によって生まれ変わり、政治体制も国際関係も一新しました。その後、急速な高度成長期を経て経済大国となり、バブル期を体験して安定した成熟期が到来しました。しかし、東西冷戦の終結後の世界情勢は、それまでの予想に反して、複雑で解決の難しい数々の問題を抱えるようになりました。地球環境の悪化、民族間や宗教間の対立の激化、地球規模の大災害や治癒のめどが立たない疾病の増加、国を超えた企業の活動と資源獲得競争の増加、金融危機と経済の破たんによる社会的格差の増大。こういった劇的で急激な変化の中で、多くの人々は将来の目標を失い、現在の生活に多くの不安を抱えています。急速に機械化、情報化する社会の中で、これまで頼ってきた社会関係が崩壊し、孤独感を抱えて生きる人々が急増しています。理想的な社会とは何か、人間の幸福とは何かを、根本的に考え直す時代にさしかかっているのではないのでしょうか。

この激動期のなかで、大学が果たすべき役割とは何か、時代の趨勢を見極めつつ正しい道を選択していかねばなりません。教育基本法や学校教育法によって大学の役割は教育、研究、社会貢献と定められています。京都大学は総合大学、研究型大学として位置づけられ、活発な研究活動を通じて社会貢献を果たすべきと見なされています。これまで京都大学はその期待にこたえるべく、多くの競争的資金を獲得して研究環境を整えるとともに、世界最先端の業績を数多く積み重ねてきました。新しい学問分野を構築し、世界をリードする研究を展開し、学際的、国際的な研究拠点をいくつも構築してきました。本学に属する18の研究所や研究センターは全国の共同利用・共同研究拠点として認められ、多くの学問分野で最先端の研究者が結集する創造的・実践的研究拠点として機能しています。学内には学問分野を超えて連携し、教育や研究を行うユニットも作られ、現代の多様で学際的な研究課題に応えるべく活動しています。これらの研究

活動の効率性や達成度を高め、組織間の人的流動性を加速させるために、京都大学はここ数年にわたって事務改革や教員組織改革を構想し、実施に移してきました。それは時代の先端を行く改革であり、新執行部もその理念と内容を十分に踏まえながら改革を継続していこうと考えております。

ただ、これらの改革を実施していくためには、共通の理念のもとに全学の合意が得られなければなりません。私自身の総長の任期を超えて、30年後、100年後の京都大学がどうあるべきなのか、という長期的な視野のもとで理念を共有し、それに向かって改革を推進するのではありません、多くの教職員そして社会の合意は得られないでしょう。その共有すべき理念として、私は大学の最も根幹的な使命は教育であり、未来の世界を支える優秀な人材を育てることを教職員の共通の目標としたいと思います。京都大学にはさまざまな部局があります。10の学部、18の大学院研究科等、14の研究所と17の教育研究施設等はそれぞれ分野もミッションも異なります。しかし、学部生、大学院生、ポスドクや任期付きの研究員や助教など、若い世代の教育にさまざまな形で関わり、自らの立場に応じてそれを分担していくことで理念を共有できるのではないのでしょうか。もちろん教育に関わる姿勢や方法には多様な形があります。古今東西の文献を詳しく読解する方法から、実験やフィールドワークを通じたきめ細かな指導、研究者の背中を見せる一見突き放した指導法もあるでしょう。ただ、すべての教職員が学生との対話を重視し、現代の常識を塗り替える新しい発想を持つ優れた人材を育てることを共通の理念として抱き、その実現に心を砕けば、京都大学はきっと世界に冠たる学問の都となるであろうと私は信じて疑いません。

そのための活動指針を以下に示します。



京都大学の活動指針

まず、私は京都大学を世間から少し距離を置く、静謐な学問探求の場であるとともに、世界や社会に通じる窓として位置づけたいと思います。大学教育が小中高の教育と異なるのは、未知の、まだ正解のない課題に取り組む必要があるからです。高校までの教育は、この世界を形作るこれまでの常識や知識を正しく伝えることで成り立っています。それゆえ、教員は厳格な審査によってその資格を得、教科書の内容は綿密な検定を受けます。しかし、大学の教員は大学独自の基準によって採用が決定され、その教育内容は教員独自の視点で大幅に認められています。それは、教育研究にそれぞれの大学の自治が大きく認められているためです。そのため、大学の教員は自身が学生に何を伝え、どんな能力を伸ばすべきかを常に考え、時代の先端をゆく知識や技術を吸収し、それを自分の考えのもとに消化しておかねばなりません。大学の教育とは知識の蓄積と理解度だけを向上させるものではなく、既存の知識や技術を用いていかに新しい発想や発見が生み出せるかを問うものだからです。教員たちはこれまでの経験を通じて、世界に社会にどんな未解決の課題があるかをよく知っており、そういった課題に挑戦してきた数多くの先達の歴史に通じています。それを学生たちに示しながら、学生たちが自らの能力と可能性に気づき、それを発揮する舞台を整える役割が京都大学の教職員にはあります。すなわち、有能な学生たちが活躍できる世界や社会へ通じる窓を開け、学生たちの背中をそっと押して送り出すことが、私たちの共通な夢であり目標であると言いたいのです。

その窓にちなんで、私は「WINDOW」という標語を作りました。

「WINDOW」

(1) Wild and Wise

最初のWは、Wild and Wise、すなわち野生的で賢い学生を育てようという目標です。第二次大戦後70年を過ぎようという現代、学生たちの生活環境はすっかり変わりました。コンビニエンスストアやスーパーマーケットへ行けば、ほしいものはすぐ手に入るし、インターネットを覗けば関心を引く情報であふれています。自分が何を望んでいるかさえ、コンピュータが教えてくれる時代です。未知の世界に分け入って予想外のものに遭遇し、数ある情報の中から正しい道筋、自分に合った方法を選択していくという経験をする機会が少なくなっています。

ぜひチャレンジ精神を大いに発揮して未知のものに挑戦し、賢い判断と優れた意思決定ができるような能力を身につけてもらいたい。そのための実践の場を多く設けようと考えています。

(2) International and Innovative

次のIは、International and Innovativeです。現代は国境を越えてめまぐるしく人や物資が流れ込んでくる時代です。日本にいても、そうした国際性豊かな環境とつき合わざるを得ません。まして、自分の発見や発想を世界で試そうと思えば、常に世界の動きに目を配り、世界の人々と自由に会話できるコミュニケーション能力を磨かなければなりません。そして、国際性、学際性に富んだ会話の中から時代を画するイノベーションが生まれるのです。多くの先端的な学問分野を有し、対話を重視した教育研究環境を提供してきた京都大学は最もイノベーションを起こしやすい条件が整っていると言えましょう。今後はその知の遺産を受け継ぎながら、海外の大学や研究機関と人、知識、技術の交流を促進し、さらに国際性を高める努力をしていこうと考えています。

(3) Natural and Noble

Nは、Natural and Nobleです。日本文化の伝統は、自然にあまり手を加えず、自然のありのままの姿から学ぶことを旨とします。京都にはそのような古人の思考が幾重にも蓄積している場所がたくさんあります。西田幾多郎は哲学の道を歩いて思索を練り、今西錦司は北山から湖北の山々を歩いてパイオニア精神を磨きました。京都大学のすぐ東には吉田山があり、建学以来多くの学徒が散策をする場所として名高く、寮歌にも謳われています。この自然の恵みに満ちた京都の環境を大いに利用しながら、京都大学の独創性は育まれ、多くの新しい思想や学問が生まれたのです。京都大学の学生や教職員は自然に学ぶ心を忘れてはなりません。そして、人間としての品格を常に意識してほしいものです。昨今は、人間性を疑うような事件が相次ぎ、教育者や科学者の倫理にもとるような行為が目立ちます。京都大学もその例外ではありません。自然に学ぶとともに、人間として恥じない行いを心掛け、高潔な態度を身につけていただきたい。全学でその意識を高めるような努力をしたいと思っています。

(4) Diverse and Dynamic

Dは、Diverse and Dynamicです。グローバル社会の到来で、現代は多様な文化が入り混じって共存する

時代になりました。これまで日本は均質性をもとに、目的意識を共有する強靱な組織をつくり、急速な経済成長を成し遂げました。しかし、その均質性が今の時代は創造力を弱め、イノベーションの育成を阻んでいるとも言われています。これからの時代に必要なのは、多様なものを受け入れ、それらを組みかえながら、新しい発想を生み出すことでしょう。それにはまず、京都大学が多様な文化や考えに対してオープンであり、多様なものを自由に学べる場所であればなりません。そして、現代は物事や常識が急速に変化していく時代でもあります。さまざまなサブカルチャーがあちこちで立ち上がり、瞬間に消えていきます。ネットを利用した呼びかけによって民衆が蜂起し、クーデターにつながることもさきあります。そういった社会のダイナミックな動きに目をそらすことなく、自分の存在をきちんと見つめ直すことが求められています。時代の動きに敏感に反応するだけでなく、100年を超える時代の大きな動きをとらえ、その中で自分と自分の生き方を正しく位置づけてほしいのです。そのために、大学は社会の動きとは少し距離を置いた、多様な思想とその流れが大きな視野で眺められる場所であってはなりません。

(5) Original and Optimistic

Oは、Original and Optimisticです。Originalすなわち独創性は、京都大学の誇る精神であり、これを涵養することが京都大学の教育といっても過言ではありません。しかし、独創性はそう簡単に育むことのできるものではありません。誰も考えつかないアイデアや、常識を塗り替えるような発想は、実は多くの人の考えや体験を吸収した上に生まれるのです。まずは、すばらしいと感動した人の行為や言葉をよく理解し、それを自分のものにするのが大切です。その人の心や体になってその考えを味わい、そこから新たに自分独自のものを見つける作業が、独創性を生み出すのです。そのためには、他人の考えに同調しつつも、そこに新たな課題を見つけることが大切です。その課題を直接本人や他の仲間と語らい、確かめることによって、しだいに自分の考えを自覚し、固めていくのです。世の中にブレイクスルーを起こすような発想は、決して一人の思考からは生まれません。仲間とそのきっかけになるような考えを繰り返し出し合いながら、思考を深めていく過程が必要です。そしてその語らいは楽しいものでなければならないのです。よく、自分の考えを仲間に戻められて悲観し、閉じこもってしまう学生がいますが、それを明るく乗り越えるような精神力を持たねばなりません。今の日本に欠けているの

は、異色な考えを受け入れ、討論を通じてそれを発展させる意欲と、失敗を糧としてそれを成功に導く力でしょう。私たちはもっと自分の失敗や他者からの批判に対して楽観的にならなければならないと思います。京都大学の議論は、伝統的に相手をとことん打ち負かすことをせず、批判を受け入れて互いに高め合う方法をとってきました。だからこそ、分野を超えた討論が可能であり、それが独創性を育む源泉になっています。市井にも各分野で鋭い批評家がいて、京都の文化の高い品格を支えてきました。この土壌を十分に活用して、明るい議論を展開し、独創性にあふれた発想を世界に発信し続けようと考えています。

(6) Women and Wish

最後のWは、Women and Wishです。男女共同参画社会の実現が謳われてすでに多くの年月が経過しましたが、未だ道遠しというのが現状です。他の国に比べると、政府や企業で役職についている女性の比率は極めて低く、給料や待遇の面でまだ女性が差別されている面が多々あります。育児休暇の取得率も低く、とくに男性の育児休暇取得率は極めて低く抑えられています。これはまだ、日本社会が真に女性の社会進出を認めていない証です。これからの京都大学は女性が輝く場所でありたいです。そして、男女がその生物学的な差異を乗り越え、互いに協力して平等な社会環境を構築するためにあらゆる努力をしようと考えています。男女共同参画社会の実現には、将来に大きな期待を抱き、改善すべき点を一つ一つ解決していくことが必要です。希望を持つこと、明るい未来を心に描くことが求められており、その具体的な計画を全学の合意によって進めていきたいと思っています。

「WINDOW」の実現を目指して

これらの目標を実現するために、まず私は新しい執行部を全学体制にいたしました。全部局を構成する学部群、研究科群、研究所・センター群からそれぞれ部局長を経験した理事を選び、外部から文部科学省、厚生労働省の経験者を選びました。男女共同参画を担当する女性の理事を、さらに産官学連携を専任で担当する理事を配置しました。また、これまでに実施してきたさまざまな活動を継続するために、大学改革と法務・コンプライアンスを担当する副学長に留任していただくとともに、新しく教育改革と大学基金・同窓会を担当する副学長を配置しました。

京都大学が世界をリードしてきた独創的で先端的な研

究は、さらにその存在力を世界へ示していかなければなりません。その環境や体制を整え、多くの競争的資金を獲得し、新たな研究が生まれるための努力を惜しみません。そのためには、教員と職員が一体となって、無駄を省き、効率のいい活動ができるように協力体制を変えていく必要があります。共通事務部の設置による事務改革、学域、学系から成る教員組織改革が現在進行中ですが、なるべく学際的、国際的な研究のしやすい組織・体制作りを心がけてまいります。URAなど中間職を主体としたサポート体制も充実させます。

教育再生は大学改革の大きな柱です。昨今、学問分野の多様化とともに細切れの学問を履修し、狭い教養の知識しかもたずに社会に出る学生が多いことが問題視されています。とくに、高校で選択科目が増えたために、偏った知識をもって入学してくる学生が増えています。大学ではまず、広い教養をしっかりと身につけ、基礎的な学力を磨いて、専門教育へとつなぐことが必要になります。そのために、京都大学は国際高等教育院を設立し、全学共通科目の選定とカリキュラムの構築を実施しています。初年次の学生が、自分の興味を生かしつつ、体系的なコース履修ができるような改善がなされつつあります。また、部局によっては理学部のように少人数担任が配置され、学生毎に履修指導を行うような仕組みを設けています。今後さらに対話を重視した履修指導を徹底し、確かな科目選択と履修単位の修得を推進していきたいと考えています。京都大学は教養部を設けず、全部局体制で初年次から先端的な研究に直接触れられるような教育を実施しています。その試みがポケットゼミで、多様な部局の教員が少人数のゼミを受け持ち、現在世界で行われている最先端の研究を紹介し、実験やフィールドワークを通じてその学問の特色を対話によって学ぶことを実践しています。また、現在進行中の5つのリーディング大学院プログラムは、総合生存学館(思修館)をはじめとして産業界、国際機関に広くつながりを持ち、実践的な研修を通じて社会で活躍できる人材育成を推進しています。こういったこれまでの試みを維持しつつ、基礎・教養教育、ポケットゼミ、専門教育、先端的研究をうまく組み合わせ、対話を重視した高度な教育を展開していく所存です。

また、国際性の向上は京都大学の大きな課題です。講義の英語化、外国人教員の増加、留学生や日本人学生の留学の増加が求められています。新執行部では、学生や教職員の国際性や対話能力の向上を図るために、海外の大学と結ぶリエゾンオフィスを充実させ、双方向の国際交流を図ろうと考えています。今まで留学や海外への派遣は個人の選択に任されていました。しかし、京都大学の

教員は海外の大学や研究機関と多くの緊密なネットワークをもっています。それを大学として活用し、短期や長期の教員、学生の相互交流に役立てようと思います。学生がまとまって教員とともに海外で活動したり、教員同士の連携に学生が加わって講義や単位の相互互換を図ったりしながら、ダブル・ディグリー、ジョイント・ディグリーの推進を図ろうと考えています。また、外国語による対話能力を身につけるため、日本人学生と留学生の外国語による交流を促進したいと思います。そのために、国際性のあるテーマで外国語による公開セミナーや討論会を主催したり、京都の文化に触れる合宿制の交流を実施したりしようと考えています。

近年、産官学連携と社会貢献は大学の重要な使命となりました。国は多額の出資金を大学に与え、大学発のベンチャー企業の設立を推進しています。京都大学もこの出資金による新会社を設立しました。この運営には多くの企業が参入しており、今後どう動かしていくかは大学の存立にとって極めて重要です。新執行部では産官学連携専任の理事を配置し、この理事が産官学連携本部長を兼任して新事業に当たります。こういった事業を推進していくためにも社会との連携は重要です。大学が何をしているか、どういった研究や新しい事業を大学が目指しているかを常に正確に社会へ発信していかなければなりません。そのコミュニケーションの充実を図るために広報室を増強し、メディアと協力して京都大学独自の広報戦略を考案していこうと考えています。また、京都には世界に誇る多くの文化遺産があります。文化の粋を集めて作られた建築物や廃校になった小中学校が、再利用可能な状態になっています。これらを京都市や京都府と協力しながら教育文化活動が可能な施設として再生させ、他の大学と連携して利用できれば、世界に誇れるさまざまな共同事業を展開できます。私はこれを「京都・大学キャンパス計画」と呼んでおり、外国人の教員や留学生を巻き込んで分野を超えた活動を構想しようと考えています。

京都大学に欠けているのはデザインやアートなど芸術系の学部・研究科です。京都には芸術系の大学がたくさんあり、これらの大学と協力することで京都大学の独創性をさらに発展させ、社会に提案することができると期待しています。

近年、文部科学省が大学に強く要請しているのは、総長のリーダーシップを強めるガバナンスの改革です。教授会の役割を定め、全学の合意形成を効率的に進めるための内規変更が求められています。私は、全学の速やかな合意を得るためには、総長が指揮を執る決定事項に教授会の意見を十分に反映させる必要があると考えています。ただ、最近の外部からの要請はその決定までのプロセスが大変短く、部局で十分に審議の時間を取れないことが多くなっています。大きな部局はさらに複数の専攻や教室に分かれており、意思決定にかかるプロセスが長くなります。このプロセスを短縮し、現状に合ったものにしていかないと、競争的資金の獲得や産官学連携のスピードには対応できません。そのため、新執行部ではなるべく情報開示を早め、案件毎にあらかじめ決定に至る時間を想定し、そこに各部局の審議がどのように関わるかを示して、なるべく全部局の意見を聞く場を設けることにしたいと思います。各部局でもなるべく短期間に意見を集約し、速やかに全学的な議論に載せられるような改革を積極的に進めていただきたいと思います。

現在、大学は第2期中期目標・中期計画の終わりにさしかかり、第3期へ向けて改革を加速する期間にあります。これまで自由の学問の府として、その輝かしい存在を示してきた京都大学の今後の歩みは、全国の大学や教育・研究機関をはじめ、社会から大きな注目を集めています。全学の教職員が京都大学の良さとは何かを真剣に考え、学生を主役とする未来の夢ある京都大学に向かって一体となって取り組めるよう、なにとぞ協力をお願いしたいと思います。

平成27年度卒業式 式辞



本日、京都大学を卒業される2,876名の皆さん、誠におめでとうございます。ご来賓の井村裕夫元総長、長尾真元総長、名誉教授、列席の理事、副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、皆さんのご卒業を心からお祝い申し上げます。あわせて、今日の卒業式を迎えるまでのご家族および関係者の皆様よりいただいた数々の厚いご支援に対し、心より御礼申し上げます。京都大学が1897年に創立され、1900年に第1回の卒業式を迎えて以来、119年にわたる京都大学の卒業生の数は皆さんを含めて202,725名になりました。

*

さて、皆さんは入学以来、どのような学生生活を送ってきたでしょうか。本日はぜひ、この数年間京都大学で過ごした日々のことを思い出してください。厳しい受験戦争を勝ち抜いて入学した皆さんは、京都大学にどんな期待や夢を抱いていたでしょうか。今日、卒業式を迎えるまでの数年間、それは叶えられたでしょうか。それとも、その夢は大きく変貌を遂げたのでしょうか。そして、皆さんがこれから歩いていこうとされる道は、そのころの夢とどうつながっているのでしょうか。

私が京都大学で過ごした1970年代は、日本が大きく

変わろうとしていた時代でした。入学した年には大阪で万国博覧会があり、世界の科学技術が競い合って展示され、新しい文明や宇宙への夢が大きく花開きました。同時に日米安保条約の改定をめぐって学生運動が過激な政治闘争へと発展し、内ゲバやテロなど悲惨な事件が多発しました。生協の食堂でテレビを見ているとき、三島由紀夫の割腹自殺を告げるニュースが画面に流れ、私は大きなショックを受けたことを覚えています。新しい時代が始まる予感はまだありませんでしたが、ある時代が終わったことを確信させる事件でした。私はそのとき、日本に、そして大学に学ぶべきものは残っているのだろうか、という疑問を心に抱いたのです。

あの時代、新しい知識を得る源泉は、映画と本でした。私が高校生のころ、「卒業」という映画が封切られ、大ヒットしていました。アメリカの大学を卒業したばかりのベンが故郷で再会した幼馴染のエレン。その母親との不倫とエレンとの恋の葛藤が、サイモンとガーファンクルの不思議なメロディーに乗って私たちの心に迫ってきます。ベンを拒否したエレンが別の男性と結婚式を挙げようとしているところに、ベンが飛び込んでいって、心を翻したエレンと駆け落ちをするシーンがエンディング

なのですが、バスに飛び乗った二人を眺める老人たちの目が印象的です。世間の常識を破り、親と決別して新しい道を歩みだした彼らを待っているのは、冷たい伝統と倫理の壁なのか、それとも新しいものを受け入れる暖かい社会なのか。それを問いかけている映画だったと思います。それはまさに、日本の大学を卒業する学生たちにも共通する問題でした。

当時の学生のほとんどが読んでいた柴田翔の「されどわれらが日々」という小説があります。東大生の主人公が古本屋でHという作家の全集に出会い、それが奇妙にからみついてくるような印象にとらわれたことから物語は始まります。古本屋の常連だった私も、同じような感情を抱いたことがあります。それは、その本の内容を知る以前に、本が私の手元に来たがっている、作者が紡いだ物語の世界が私に何かを見せてがっているような気分なのです。そして、本を開くと見ず知らずの誰かが書き込んだ傍線やメモ書きが目に入り、思いかげずその本と親しんだ読者とめぐり合う。「されどわれらが日々」の主人公が購入したH全集に押しあつた蔵書印から、付き合っている彼女や、政治運動をともにした仲間との関係を問い直し始めるのです。そのとき、真摯に心を吐露する方法は対話と、そして手紙でした。研究生活に進んだ仲間が主人公に語った言葉があります。「ぼくは、一つだけ自分に課して守ろうとしていたことがある。それは、どんなに多くの人が賛成することでも、どんなにうまく形が整っていても、ただ、自分で考えてみて、隅から隅まで納得の行くこと以外は、何も決して信じまいということなんだ」。大学に入ってから、私は何度もこの言葉を反芻したことを覚えています。

柴田翔と同年に歌人であり劇作家であった寺山修司がいます。「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや」という歌に心を衝かれ、日本人としてのアイデンティティを改めて見つめなおした人々がそこにはたくさんおりました。私の学生時代、日本の風景は大きく変貌しました。あちこちでダム建設が始まって多くの村が水没し、住民たちは新しい土地へ移住を余儀なくされました。全国に高速道路やスーパー林道が建設されて山や森が分断され、造林政策によって広葉樹林は杉や檜の単層森へと変わっていきました。都市には新しい文化が溢れ、次々に多様な価値観が流れ込み、生まれる時代でした。そんな時に、寺山は「書を捨てよ、町へ出よう」という本を書いて、若者たちに常識や伝統を疑い、日々の生活の裏に隠されたさまざまな企みを見破ることを奨励しました。私も大学だけが学びの場ではなく、キャンパスの外にこれからの世界を色付けていく多

様な兆候を読み取らねばならないと感じていました。

開学以来、京都大学は対話を根幹とした自由の学風を伝統としています。私もその伝統をじゅうぶんに活かしながら、時代の風を感じ取ってきました。私が目を開かれたのは、学問分野の壁を越えて話し合う数々の自主ゼミや研究会でした。そのなかで私は、多くの異なる考え方に出会い、違った世界の解釈の仕方に耳を傾けました。そのころ手にした本の中で最も大きく心を揺さぶられたのは、伊谷純一郎の「ゴリラとピグミーの森」でした。独立前夜の 아프리카に単身乗り込み、野生のゴリラを追って密林の奥まで自分の足で入っていく。その過程で著者は今までに見たことも聞いたこともない体験を積み重ねていきます。そこで問われるのは、日本という小さな国の文化ではなく、ゴリラと共通の祖先から進化した人間という生命体の存在と由来でした。自分は人間でありながら、その由来についてまだ何も確かなことを理解していない。その事実は大きな衝撃を私に与えました。しかも、恥ずかしいことに、その本の著者が私の所属する理学部の教員であることに私は初めて気がついたのです。すぐに私は伊谷先生に会いにいき、アフリカの原野に人間の由来を求めて思いをはせるようになったのです。それが私の人生の大きな転機となりました。

*

皆さんが京都大学で過ごした数年間も、世界は大きく変貌しました。入学前後に東日本大震災が起り、放射能に汚染されて人間が居住できない地域が日本に出現しました。エネルギーに対する考え方と原発に支えられてきた豊かな暮らしについて、大きく見直しが求められるようになりました。環境汚染や地球温暖化による影響で、地球の利用できる資源が急速に劣化していることが明らかになり、人間の活動にさまざまな規制がかけられるようになりました。民族や宗教による対立が激化し、多くの難民が生み出されて、各国のこれまでの協力体制や連携にひずみが生じています。こういった社会や世界の急速な動きのなかで、皆さんは何を考え、どういった決意を新たにしてきたのでしょうか。

知識を得る方法も、現代は私たちの時代と大きく異なります。それは1970年の万博で予測されていたことですが、情報機器の発達により、いつでもどこでも、簡単に既存の知識にアクセスできるようになりました。膨大な映像が情報機器を通じて無料で流れ、もはや、本は知識を得る貴重な手段ではなくなりました。メールや携帯電話が主要な伝達的手段となり、手紙を書くことはめったになくなりました。しかし、対話だけはこころを伝え合い、議論を通じて新しい考えを生み出す手段として今

も生き続けています。

今日卒業する皆さんも、これまでに京都大学を卒業した多くの先輩たちと同じように自由闊達な議論を味わってきたと思います。その議論と学友たちはこれからの皆さんの生きる世界においてきわめて貴重な財産になるでしょう。京都大学には創造の精神を尊ぶ伝統があります。まだ誰もやったことのない未知の境地を切り開くことこそが、京都大学の誇るべきチャレンジ精神です。今日卒業する皆さんのなかにもさまざまな突出する能力を身に着け、すでにそれを発揮して活躍している方が多いだろうと思います。京都大学で磨いた能力を示し、試す機会がこれからはきっと多くなることでしょう。しかし、忘れてはならないことは、自分と考えの違う人の意見をしっかりと聞くことです。しかも複数の人の意見を踏まえ、直面している課題に最終的に自分の判断を下して立ち向かうことが必要です。自分を支持してくる人の意見ばかりを聞いていれば、やがては裸の王様になって判断が鈍ります。このとき、京都大学で培った「対話を根幹とした自由の学風」がきっと役に立つはずですよ。

京都大学は「地球社会の調和ある共存」を達成すべき大きなテーマとして掲げてきました。現代はこの調和が崩れ、多様な考えを持つ人々の共存が危うくなっている



時代です。皆さんもこれから世界のあちこちでこのテーマに抵触する事態に出会うことでしょう。そのとき、京都大学の自由な討論の精神を發揮して、果敢に課題に向き合ってほしいと思います。皆さんがこれから示すふるまいや行動は、京都大学のOB、OGとして世間の注目を浴び、皆さんの後に続く在校生たちの指針となるでしょう。これから皆さんの進む道は大きく分かれていきます。しかし、将来それは再び交差することがあるはずですよ。そのときに、京都大学の卒業生として誇れる出会いをしていただけることを私は切に願っています。

本日は誠におめでとうございます。

2016年4月7日

平成28年度大学院入学式 式辞

本日、京都大学大学院に入学した修士課程2,307名、専門職学位課程318名、博士(後期)課程854名の皆さん、ご入学おめでとうございます。ご列席の理事、副学長、研究科長、学館長、学舎長、教育部長、研究所長および教職員とともに、皆さんの入学を心からお祝い申し上げます。また、これまで皆さんを支えてこられたご家族や関係者の皆さまに心よりお祝い申し上げます。

*

さて、今日皆さんはさらに学問を究めるために、それぞれの学問分野へ新しい一歩を踏み出しました。京都大学には多様な学問分野の大学院が設置されており、合計23種類の学位が授与されます。18の研究科、14の附置研究所、17の教育研究施設が皆さんの学びを支えます。修士課程では講義を受け、実習やフィールドワークを通じて学部で培った基礎知識・専門知識の上にさらに高度な知識や技術を習得し、研究者としての能力を磨くことが求められます。専門職学位課程では、講義のほかに実

務の実習、事例研究、現地調査などを含め、それぞれの分野で実務経験のある専門家から学ぶ機会が多くなります。博士後期課程では論文を書くことが中心となり、そのためのデータの収集や分析、先行研究との比較検討が不可欠となります。

ここで重要なことは、データに語らせることです。そして、それを分析して得た自分の考えを仲間に語り、その真価を繰り返して確かめることです。しかし、データに語らせることは決してたやすいことではありません。そもそも、データの取り方が間違っていれば、採取したデータは自分が立てた問いに正しく答えてはくれません。まず、自分が一体何を知りたいのかを十分に吟味し、問いを立てることが必要ですし、その問いに合った方法論を選ぶことが重要となります。

その上で、データを取るわけですが、ここが最も大事な作業であるとともに、思いがけない発見が生まれる瞬間でもあるのです。長年、野生のサルやゴリラを対象に





フィールド調査を行ってきた私は、この段階で長い間苦勞を重ねました。何しろ、野生のゴリラが人間になれていなかったために、思うように行動や社会に関するデータが取れなかったのです。そのため、毎日森を歩いてゴリラの痕跡を探し、新鮮な足跡を見つけると、それをたどってゴリラを追跡することを続けました。運よくゴリラに出会っても、人間の気配を察知したゴリラが一声叫ぶと、群れ全体がさっと視界から消えてしまうことばかりでした。これでは行動のデータを取れません。それでもゴリラがしていることを推理するために、糞を採集してその内容物から何を食べているかを同定したり、毎晩作りかえるベッドの数や大きさから群れの個体数や構成を割り出したりしました。そのうち、ゴリラはだんだんと警戒心を解き始めるのですが、ここからが正念場です。ゴリラも人間について回られるのは嫌なので、脅かして追い払おうとします。大地が割れんばかりの吼え声を上げて突進してきます。このとき震え上がって逃げたら、ゴリラはわが意を得たとばかり、攻撃すれば人間は退散してくれると思込んでしまいます。どんなに脅されても一歩も引かず、正面から向き合ってゴリラと対峙することが必要なのです。攻撃してもむだだとわかると、ゴリラはしだいに怒りを抑えて、人間が接近するのを許すようになります。

私たち観察者が後を着いて歩くのをゴリラが気にかけないように、ついには群れの中に入っていても普段の暮らしを乱さないようになって、初めてゴリラの自然な行動を記録できるようになるのです。ここまでふつうは5年以上かかります。その間、思うようなデータを取れず、間接的な証拠からゴリラはこんな行動をしているに違いないなどと憶測をめぐらせる日々が続きます。それだけに、実際ゴリラの行動を見ることができるよう

になって、その憶測を確かめられたときの感激はひとしおです。たとえば、食物を分配する行動はチンパンジーでよく知られていましたが、ゴリラでは報告されていませんでした。でもそれは、これまで調査されていたゴリラが高い山にすむマウンテンゴリラで、甘く栄養価の高いフルーツが実らない環境条件にあるからだとは思っていました。近年、アフリカ低地の熱帯雨林にすむローランドゴリラの調査を始めると、チンパンジーと同じように多種類のフルーツを食べることが分かってきました。私は、低地のゴリラたちがきつと

食物を分配しているに違いないと思い、何とかその場面を見られないものかと期待しながらゴリラを追いかけていました。そして、ある群れのゴリラたちと付き合い始めてから6年目に、ゴリラたちがフットボールぐらいの大きさのフルーツを分けて食べるのを観察することができたのです。しかも、それは私が想像していたようなチンパンジーの分配行動とは違って、フルーツのかけらを地面に落として仲間に取りさせるゴリラらしい分配方法でした。とうとうそのシーンを見ることができたという感慨とともに、想像を超える展開に私は目を見張りました。しかし、そのシーンを写真に撮ることに成功したものの、ゴリラの分配行動について論文を仕上げるにはそれからさらに4年の歳月が必要でした。その後、調査をともにした仲間たちが見たゴリラの分配行動と合わせて状況を分析し、チンパンジーや他の霊長類の報告と比較しながら、ゴリラの分配行動の進化史的意義を検討しなければならなかったからです。それは楽しい作業でしたが、時にはとても辛抱や忍耐を要することでもありました。でも、私は自分が見たことは世界中でまだ誰も体験したことがない現象であることを知っていました。その意味を明らかにし、公表することは私たちの義務であると感じていたのです。それは、一般の人々にとって何の意味もない、取るに足らないことかもしれません。しかし、ひょっとしたら私たちの発見がゴリラの進化に関するこれまでの常識を変え、ゴリラと共通の祖先を持つ私たち人間に対する理解を変えるかもしれない私は思っています。

*

日本で最初にノーベル賞を受賞した湯川秀樹先生は、1962年のノーベル賞受賞13年後に開かれた京都大学の教官研究集会で、大学の本来の使命とは、「私たちの

生きている、この世界に内在する真理を探究し、真理を発見し、学生たちに、後進の人たちに、そして学外の人たちにも真理を伝達すること」と語っています。真理の性格について、湯川先生はまず、真理はその現実の姿においては、多方面にわたって集積されてきた、非常に多数の事実、それらの事実の全体の中の一部を支配する法則、それらの法則のいくつかを自己の中にふくむ理論体系—そういう諸事実、諸法則、諸理論の全体であると述べます。しかし、それが最終的意味における真理の全部ではありません。現実において私たちの知っている真理は部分的なものであると同時に、非常に多くの方面に分化しています。同じ法則、あるいは原理が、他の種類の現象に対しても同様に成立するというわけにはいかず、両方に共通する原理がまだ知られていないという場合もあるのです。現在までに世界各国の学者の手がまだのびていない領域、すなわち未知の領域が存在すること、またすでに研究の手がのびている領域に関してもそこに多くの未解決の問題が残っていることを、研究者は知っている、と湯川先生は言います。そして、学問的真理がこのような性格を持つものであればこそ、「真理の探究」ということが重要な意味を持つのであり、学問とは全体として固定されてしまった何物かではなく、新しい事実、新しい法則—一口に言って新しい真理の発見によって変化し、成長し続けていくものである、と述べておられます。

現在、大学の研究は産業界の発展に結びつくことが期待されていますが、京都大学は社会にすぐ役立つ研究だけを奨励しているわけではありません。開学以来、対話を根幹とした自由の学風を伝統とし、独創的な精神を涵養してきました。それは、多様な学びと新しい発想による研究の創出につながります。皆さんはこれから専門性の高い研究の道へ入られるわけですが、それは狭き道をまっしぐらに進むことを意味するわけではありません。多くの学友や異分野の研究者たちと対話を通じて自分の発想を磨くことが、真理の道へ通じるのです。今日、京都大学の大学院に入学した皆さんも、いつかは自分の専門を離れて別の学問領域に目を向ける日が来るかもしれません。それも自分の学問分野で成功するのに匹敵する輝かしい飛躍であり、新たな可能性を生み出す契機となると私は考えています。どうか失敗を恐れず、自分の興味の赴くままに、研究生活に没頭してください。京都大学はそれにふさわしい環境を提供できると思います。

京都大学には34のユニットがあり、学際的にさまざまな教育・研究活動を行っています。複数の研究科、研究所、研究センターからなる教育プログラムや研究プロジェクトが走っておりますので、ぜひ参加をして多様な

学問分野に目を開き、創造性を高めてください。さらに、博士の学位を得て実践的な舞台でリーダーシップを発揮する5つのリーディング大学院プログラムが実施されています。京都大学大学院思修館、グローバル生存学大学院連携プログラム、充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム、デザイン学大学院連携プログラム、霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院プログラムがあり、それぞれ連携する大学院が指定されていますので、ぜひ関心を持っていただきたいと思います。また、昨今は、データの改ざんや剽窃など、論文制作に関わる不正行為が数多く指摘され、世間の厳しい目が研究者に注がれています。ぜひ、研究倫理を守り、独創性の高い研究を実施して、大きな成果を挙げていただきたいと思っております。

日本は、博士の学位を取得した学生が産業界に就職しにくいと言われてきましたが、最近は多くの企業が国際化する中で、博士の学位を持つ人材を積極的に雇用する兆しが見え始めています。それには大学院在籍中に企業の実践的な現場を知ることが重要で、本学でも産学協同イノベーション人材育成コンソーシアム事業として、多くの企業に参加してもらい、中長期のインターンシップやマッチングを実施しています。社会に出る前に産業界の現場を経験し、自分の能力や研究内容に合った世界を知る機会を増やそうと考えております。また、国際的な舞台で活躍できる能力を育成するために、海外のトップ大学とダブル・ディグリーやジョイント・ディグリーを増やそうとしています。現在、京都大学はロンドン、ハイデルベルク、バンコクに海外拠点を持ち、ヨーロッパやアジアの大学との連携を強めておりますが、今年は北米やアフリカにも拠点を設け、大学間交流の場を増やしていこうと考えているところです。すでに京都大学の多くの部局は世界中に研究者交流のネットワークや拠点をもっており、これらの拠点を活用しながら、共同研究や学生交流を高め、国際的に活躍できる機会と能力を伸ばしていく所存です。

このように、京都大学は教育・研究活動をより充実させ、学生の皆さんが安心して充実した生活を送ることができるよう努めてまいります。そのための支援策として京都大学基金を設立しています。本日も、ご家族のみなさまのお手元には、この基金のご案内を配布させていただいております。ご入学を記念して特別な企画も行っておりますので、ぜひ、お手元の資料をご覧ください、ご協力をいただければ幸いです。

本日は、誠にありがとうございます。

平成29年度卒業式 式辞

本日、京都大学を卒業される2,871名の皆さん、まことにおめでとうございます。ご来賓の井村裕夫元総長、長尾真元総長、松本紘前総長、列席の理事、副学長、学部長、部局長をはじめとする教職員一同とともに、皆さんのご卒業を心からお祝い申し上げます。あわせて、今日の卒業式を迎えるまでのご家族および関係者の皆様よりいただいた数々の厚いご支援に対し、心より御礼申し上げます。京都大学が1897年に創立され、1900年に第1回の卒業式を迎えて以来、120年にわたる京都大学の卒業生の数は皆さんを含めて208,614名になりました。

*

さて、皆さんは入学以来、どのような学生生活を送ってきたでしょうか。本日はぜひ、この数年間京都大学で過ごした日々のことを思い出してください。厳しい受験競争を勝ち抜いて入学した皆さんは、京都大学にどんな期待や夢を抱いていたでしょうか。今日、卒業式を迎えるまでの数年間に、それは叶えられたでしょうか。それとも、その夢は大きく変貌を遂げたのでしょうか。そして、皆さんがこれから歩んでいこうとされる道は、そのころの夢とどうつながっているのでしょうか。

昨年、ユヴァル・ノア・ハラリというヘブライ大学の歴史学者が書いた『サピエンス全史：文明の構造と人類の幸福』という本が日本のビジネス書大賞を取りました。私はこの本が出版されてすぐに読み、面白いと思って書評を書いたのですが、まさかビジネスマンにこんなに受けるとは思っていませんでした。この本は、有史以前の人類の進化に遡って人類の本質とは何かをとらえ、現代にいたる文明のあり方を問うことを目的にしています。その先鞭をつけたのはジャレド・ダイヤモンドの『銃・病原菌・鉄』でしょう。彼は、なぜ地域によって文明の進み方が違っているかに着目し、それが大陸の形と生態条件にあることを指摘しました。最近も、ダニエル・リーバーマンの『人体600万年史：科学が明かす進化・健康・疾病』、グレゴリー・クラークの『10万年の世界経済史』、マット・リドレーの『繁栄——明日を切り拓くための人類10万年史』など、タイムスケールの大きい人類の歴史的考察が次々に出版されています。これは、ビジネスマンをはじめ日本の一般の人々が身近な社会現象や世界の動静だけでなく、人間というものの正体をタイムマシンに乗って確かめたいと欲しているからに違いありません。それは、裏返せば、人間に対する定義や信頼が揺らいで

いるからと言ってよいのだらうと思います。

ハラリが最初に投げかけた疑問は、なぜ人類は気楽な自然任せの狩猟採集生活から、過酷で病気にかかりやすい農耕生活に移行したのかということです。それは技術革新によって一気に花開いたのではなく、劣悪な条件下でも一生懸命働けばいい暮らしができる、という思い込みが生み出したのではないかと。そして、その端緒は約7万年前に起こった認知革命にあると言うのです。言語の登場によって新しい思考と意思疎通の方法が芽生えたことが、ホモ・サピエンスを地球上のいたるところに進出させ、他の人類種や動物たちを絶滅させた原因だ、と彼は断じます。

実は、私が学んできた霊長類学の知見から、人類の脳は他の霊長類と同じように社会脳として、集団の大きさに対応して増大したと考えられています。現代人の脳は150人程度の集団で暮らすのに適しており、それは農耕・牧畜の開始以降、急速に増加した人口に適応できていない可能性があります。かわりに人類は神話を作り出して、想像上の秩序によって大集団を維持するようになりました。貨幣とは物質的な現実ではなく、相互信頼の制度であり、異なる文化、言語、宗教を結びつけてグローバル化をもたらしたとハラリは言うのです。

現代の問題は、「将来は現在より良くなるはず」という希望を支える資本主義の原則、すなわち「経済成長は至高の善」という理念が崩れ始めているということでしょう。私が京都大学の学生だった頃はまだ日本が高度成長時代で、すぐ先に明るい未来が見えているような気がしていました。大阪で万国博覧会が開かれ、科学技術によって次々に新しい可能性が切り開かれようとしていることが実感できました。しかし、やがて地球環境の劣化が問題視され、人為的影響の増大によって汚染や温暖化などの環境劣化が急速に進んでいることが明らかになりました。「持続的な開発」が謳われ、地球の劣化を防ぐための国際協約がいくつもできました。地球の資源は有限であり、人間が発展する道には限界があることが共通理念となったのです。

*

皆さんが京都大学で過ごした数年のあいだに、世界は大きく変貌をとげました。東日本大震災からの復興がままならないうちに、熊本地震が起り、多くの人々が被災しました。民族や宗教による対立が激化し、多くの

難民が生み出されて、各国のこれまでの協力体制や連携にひずみが生じています。イギリスのEU離脱、アメリカの一国主義への移行、中国の一带一路政策、こういった社会や世界の急速な動きのなかで、皆さんは何を考え、どういった決意を新たにしてきたのでしょうか。

生命に関する考え方も大きく変わりました。iPS細胞研究は、山中伸弥教授を中心にして目覚ましい発展を遂げてきました。そこには、真理を追究するだけでなく、難病で苦しんでいる人々を救いたいという山中教授の切なる思いがこめられています。しかし、iPS細胞を用いた医療技術、さらに遺伝子編集技術が急速に進化したおかげで、生命環境や人間観をめぐるさまざまな倫理的問題が浮上してきました。そこには、単に病気を治すというだけでなく、人間の命の始まりや人間の遺伝的なシナリオに手を加えるという可能性が広く開けているからです。それは、社会の年齢構成や人生計画を大きく左右して、社会の安定や動態に影響を与えます。また、医療がビジネスと結びつき、バイオベンチャーとして巨大な富を生み出し、世界の経済を動かす動因にもなりつつあるのです。

医療技術や新しい薬の創出ばかりでなく、現代は情報技術やコミュニケーション技術が急速に発展し、グローバルな世界の中で私たちは技術に思考を先導されるようになってきています。情報機器の発達により、いつでもどこでも、簡単に既存の知識にアクセスできるようになりました。膨大な映像が情報機器を通じて無料で流れ、もはや、本は知識を得る貴重な手段ではなくなりました。しかし、科学技術イノベーションには人文・社会的な知と共に、確かな人間観が不可欠であり、それを総合的な学術の蓄積から見直さなくてはならない時代です。これから皆さんが活躍するのは、Society 5.0と呼ばれる超スマート社会です。そこではICT機器が威力を発揮して人々や物をつなぎ、ロボットやAIが多くの仕事を代替することになって、互いの顔が見えなくなるかもしれません。しかし、そういった社会でこそ、人々が触れ合い、生きる力を発揮して世界と向き合うことが大切になると思います。

今日卒業する皆さんも、これまでに京都大学を卒業した多くの先輩たちと同じように自由闊達な議論を味わっ



てきたと思います。その議論と学友たちはこれからの皆さんの生きる世界においてきわめて貴重な財産になるでしょう。京都大学には創造の精神を尊ぶ伝統があります。まだ誰もやったことのない未知の境地を切り開くことこそが、京都大学の誇るべきチャレンジ精神です。今日卒業する皆さんのなかにもさまざまな突出する能力を身に着け、すでにそれを発揮して活躍している方が多いだろうと思います。京都大学で磨いた能力を示し、試す機会がこれからはきっと多くなることでしょう。しかし、忘れてはならないのは、自分と考えの違う人の意見をしっかりと聞くことです。しかも複数の人の意見を踏まえ、直面している課題に最終的に自分の判断を下して立ち向かうことが必要です。このとき、京都大学で培った「対話を根幹とした自由の学風」がきっと役に立つはずで

京都大学は「地球社会の調和ある共存」を達成すべき大きなテーマとして掲げてきました。現代はこの調和が崩れ、多様な考えを持つ人々の共存が危うくなっている時代です。皆さんもこれから世界のあちこちでこのテーマに抵触する事態に出会うことでしょう。そのとき、京都大学の自由な討論の精神を発揮して、果敢に課題に向き合ってほしいと思います。皆さんがこれから示すふるまいや行動は、京都大学のOB、OGとして世間の注目を浴び、皆さんの後に続く在校生たちの指針となるでしょう。これから皆さんの進む道は大きく分かれていきます。しかし、将来それは再び交差することがあるはずで

そのときに、京都大学の卒業生として誇れる出会いをしていただけることを私は切に願っております。

今日はまことにおめでとうございます。

平成30年度学部入学式 式辞

本日、京都大学に入学された2,961名の皆さん。入学まことにおめでとうございます。ご来賓の松本紘前総長、ご列席の副学長、学部長、部局長、および教職員とともに、みなさんの入学を心よりお祝い申し上げます。同時に、これまでのみなさんのご努力に敬意を表しますとともに、みなさんを支えてこられましたご家族や関係者のみなさまにお祝い申し上げます。

*

ここ京都は、三方を山に囲まれた盆地で、京都大学はその東の端に位置し、近くに吉田山や大文字山が望める風光明媚な場所にあります。この季節は、さまざまな木々が芽吹き、新緑が山々を彩ります。人々はこの鮮やかな色彩に心を躍らせ、新しい学びの場や職場でそれまでに蓄えてきた気力や体力を発揮して活動の舞台に臨むのです。本日入学式にお集まりいただいた皆さんも、この春の季節の明るい光とみずみずしい風に乗って、新しい活躍の舞台に上がろうとされているのだと思います。京都大学はそれを心から歓迎すると同時に、皆さんがこの京都大学で世界に向かって羽ばたく能力を磨いていただくことを願っています。京都大学は1897年の創立以来、「自重自敬」の精神に基づき自由な学風を育み、創造的な学問の世界を切り開いてきました。地球社会の調和ある共存に貢献することも京都大学の重要な目標です。今、世界は20世紀には想像もしなかったような急激な変化を体験しつつあります。東西冷戦の終結によって解消するはずだった世界の対立構造は、民族間、宗教間の対立によってますます複雑に過酷になり、地球環境の悪化は加速し、想定外の大規模な災害や致死性の感染症が各地で猛威をふるい、金融危機は国の経済や人々の生活を根本から揺さぶっています。その荒波の中で、京都大学が建学の精神に立ちつつ、どのようにこの国や社会の要請にこたえていけるか、が問われていると思います。

京都大学は自学自習をモットーにして、常識にとらわれない、自由な学風の学問の都であり続けなければなりません。そのためにまず、京都大学は静謐な学究の場であるとともに、世界や社会に通じる窓としての役割を果たさねばならないと思います。そこで、私は「大学は窓」という標語をもとに、窓にちなんでWINDOW構想を立ち上げました。大学は世界や社会に通じる窓であり、それを教職員と学生がいっしょになって開き、学生たちの背中をそっと押して送り出すことを全学の共通目標としたの

です。それぞれのアルファベットを用いてWild & Wise、International & Innovative、Natural & Noble、Diverse & Dynamic、Original & Optimistic、Women & the Worldを行動目標に掲げました。キャンパスは大学の構内だけではありません。京都大学は日本全国にたくさんの附置研究所や研究センターをもっており、世界にも50を超える研究拠点があります。これらの研究所や拠点で実験やフィールドワークに参加し、長い伝統と歴史を誇る京都の町で多くの人々と触れ合いながら能力を磨くことで、やがて世界の舞台で活躍できる人材に育つことになるのです。

*

さて、では常識にとらわれない自由な発想をするにはどうしたらいいのでしょうか。それにはまず、世界で現実起こっていることに目を向け、その背景や要因について深く考えることが大切です。私が京都大学の学生だった頃は、科学技術が乳贅され、日本が大きな開発の波に飲み込まれた時代でした。私は休暇を利用して日本列島を北から南まで歩き回り、その現実を目の当たりにしました。とくに、鹿児島県の屋久島では、まさに自然も人々の暮らしも大きく変わろうとしていました。

屋久島の中央部は九州で最も標高の高い宮之浦岳をはじめ、数々の高峰が連なり、苔むした原生林に覆われています。しかし、その険しい尾根を登って森を見渡した時、驚愕の風景が広がっていました。急峻な斜面はきれいに伐採され、丸裸の草原になっていたのです。山道に下りてみると、モミ、ツガ、タブやシイの巨木が見るも無残に切り倒され、道路脇に放置されていました。当時、林野庁は日本の原生林を役に立たない雑木林と見なして伐採し、成長が早く建材として有用なスギやヒノキを植林していたのです。今にして思えば、クマやシカやサルたちが人里へ出てきたのも、花粉症に悩まされるようになったのも、このような全面的伐採と植林によって森の構造が一変したことが原因でした。私は、日本の自然が急速に失われつつあることを実感しました。また、その目で屋久島を眺めてみると、森だけではなく、海も大きく変わろうとしていました。魚群探知機や無線を搭載した船団がいくつも島を訪れて乱獲し、豊かだった海の資源は枯渇しようとしていました。屋久島の主要産業だったサバ漁やトビウオ漁が立ち行かなくなり、土木工事に雇われたり、島を捨てて都会へ仕事を求めていく人々が



続出していました。コンクリートの護岸工事で美しい海岸線は失われ、砂防ダムができて清流がせき止められ、道路の拡幅工事で森は寸断されていました。実は、これは屋久島だけでなく、日本中で起こっていたことだったのです。

そのころ、私は不思議な出会いをしました。高校時代に時々通った「ほら貝」というロック喫茶店がありました。そのオーナーの一人だった山尾三省さんという方が、その後インドを巡礼して屋久島に移り住んでいたのです。山の上に居を構え、鋤をもって畑を耕しながら、サルやシカと付き合い、晴耕雨読の暮らしを営みつつ詩を書いていたのです。私はサルの調査をしながら三省さんをはじめ地元の人々と自然について語り合い、やがていっしょに国の伐採計画や道路の拡幅工事に意見を出すようになりました。その後、屋久島は世界遺産になりました。あの頃の活動がなければ今日の屋久島の姿はなかったかもしれません。昨年、久しぶりに三省さんの墓前に参り、学生時代を思い出しました。当時、私たちが屋久島の自然の中で何を感じていたか。それを三省さんの「水」という詩に託してみなさんに贈ります。

ぼくが水を聴いているとき
ぼくは 水であった
ぼくが樹を聴いているとき
ぼくは 樹であった
ぼくがその人と話をしているとき
ぼくは その人であった
それで 最上のは いつでも
沈黙 であった
ぼくが水を聴いているとき
ぼくは 水であった *1

屋久島は水の島です。どこにいても、いつも水の気配がします。水に命を与えられて生きている生物たちと通じ合うためには、まず言葉を捨て、沈黙のうちに耳を澄ますことです。それは相手が人であっても変わることはない自然の作法です。それを知って、私は世界が違ったものを感じられるようになりました。

もう一つ、みなさんに贈りたい言葉があります。この2月に亡くなられた俳人の金子兜太さんの一句です。

青年鹿を愛せり嵐の斜面にて *2

この句から、私は屋久島の断崖絶壁にすっくと立つシカの姿を思い浮かべます。70年代当時、シカは森の中でもめったに見かけず、人を見ると驚いて逃げてしまったものでした。切り立った断崖をまるで鳥のように軽々と跳躍していくシカの姿に、学生だった私は思わず息をのんだものでした。金子さんの句では、シカが嵐に揉まれながら、足元の定まらない斜面を行く。その孤高の姿に、今激しく時代の風に打たれている自分を重ね合わせて、目を離せなくなってしまう。そう、自然はいつでも私たちを励まし、勇気づけてくれるのです。金子さんは戦後を代表する俳人として、常に社会問題と正面から向き合ってきました。この句にはそんな金子さんの清新な魂がいきいきと読み込まれています。ぜひ、みなさんもこの句から勇気ももらってください。

現代は国際化の時代といわれます。皆さんの将来活躍する舞台も、日本という国を大きく越えて世界に広がっています。地球社会の調和ある共存のために、解決すべき課題がたくさんあります。自然資源に乏しいわが国は先端的な科学技術で人々の暮らしを豊かにする機器を開発し、次々にそれを世界へと送り出してきました。海外へと進出する日本の企業や、海外で働く日本人は近年急激に増加し、日本の企業や日本で働く外国人の数もうなぎのぼりに増加しています。皆さんがその流れに身を投じる日がやがてやってくると思います。そのためには、日本はもちろんのこと、諸外国の自然や文化の歴史に通じ、相手に応じて自在に話題を展開できる広い教養と、常識を疑いつつ真理を追求する気概を身につけておかなばなりません。理系の学問を修めて技術畑に就職しても、国際的な交渉のなかで多様な文系の知識が必要になるし、文系の職に理系の知識が必要な場合も多々あります。世界や日本の歴史にも通じ、有識者たりうる質の高い知識を持っていなければ、国際的な舞台でリーダーシップを発揮できません。京都大学は、全学の教員の協力のもと質の高い基礎・教養教育の実践システムを組み上げてき

ました。学問の多様性や階層性に配慮し、クラス配当科目やコース・ツリーなどを考案し、教員との対話や実践を重視したセミナーや少人数ゼミを配置しています。外国人教員の数も大幅に増やし、学部の講義や実習にも英語で実施する科目を配置しました。博士の学位を取得して、世界で実践的な力を揮えるように、5つのリーディング大学院プログラムを走らせています。先端的な学術ハブとして高等研究院を立ち上げ、京都大学の学問を通して全世界にネットワークを広げています。また、既存の留学コースに加え、自分自身で企画し実行する「おもしろチャレンジ」という体験型の留学制度を設けています。大学の学びだけではない、海外の文化や自然を自ら体得するフィールドワーク的な企画です。海外の多様な人々との対話を通じて、新しい学びの場で世界に貢献できる独創的な能力を育てていこうと思っています。

京都大学では、教育・研究活動をより充実させ、学生の皆さんが安心して充実した生活を送ることができるよう、支援策として京都大学基金を設立しています。本日も、ご家族のみなさまのお手元には、この基金のご案内を配布させていただいておりますが、ご入学を記念して特別な企画も行っております。ぜひ、お手元の資料をご覧いただき、ご協力をいただければ幸いです。

みなさんが京都大学で対話を駆使しながら多くの学友たちとつながり、未知の世界に遊び、楽しめることを願ってやみません。

ご入学、まことにおめでとうございます。

*1 山尾三省氏の「びろう葉帽子の下で——山尾三省詩集」(野草社、1993年)より引用

*2 金子兜太氏の「金子兜太詩集 第1巻」(筑摩書房、2002年)より引用

2018年9月25日

平成30年度博士学位授与式 式辞

本日、京都大学から博士の学位を授与される187名の皆さん、誠におめでとうございます。

学位を授与される皆さんの中には、60名の留學生が含まれています。累計すると、京都大学が授与した博士号は44,265となります。列席の副学長、研究科長、学館長、学舎長、教育部長、博士課程教育リーディングプログラムコーディネーターをはじめとする教職員一同とともに、皆さんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

京都大学が授与する博士号は合計20種類もあり、博士(文学)のように、それぞれの学問分野が称号のあとに記されています。また、7年前からリーディング大学院プログラムが始まり、これを受講し修了された皆さんの学位記には、それが付記されています。これだけ多様な学問分野で皆さんが日夜切磋琢磨して能力を磨き、その高みへと上られたことを、私は心から誇りに思い、うれしく思います。本日の学位授与は皆さんのこれまでの努力の到達点であり、これからの人生の出発点でもあります。今日授けられた学位が、これから人生の道を切り開いていく上で大きな助けとなることを期待しています。

*

私は総長に就任する以前、アフリカの熱帯雨林でゴリラの研究をしていました。熱帯雨林、通称ジャングルという場所は高温多湿で多種多様な菌類や植物が繁茂し、昆虫から爬虫類、両生類、鳥類、哺乳類に到るまで多くの

動物たちが日夜活動しています。そこは陸上生態系で生物多様性をもっとも高い場所であるとともに、様々な生物が多様な関係を繰り広げ、新しい種を次々に生み出している場所です。総長になって大学を眺めたとき、私はこのジャングルと大学がよく似ていると感じました。大学は世界の多様な知が集積する場所であり、またこれまでの歴史を担った知もそこで収集され、様々な視点から分析されています。まさに時空を超える知の拠点であり、それらの知を駆使して創造的な活動を展開する場所でもあります。そして、重要なことは大学もジャングルと同じように、新しい種、すなわち新しい考えが次々に生み出されていく場であるということです。本日、学位を取得された皆さんは、その最先端に立って新しい知を生み出してこられたのです。

博士の学位を得るということは、自分の独創的な考えを認められたということであり、未知の世界の探究者として入口に立ったということの意味します。それは、これから社会に出ていく人にとっても、大学に残って研究を続ける人にとっても同じことです。世界の未解決な課題を発見し、それを自分が置かれた環境の中で、これまでに培った知力と独創力を駆使して解いていくという作業に変わりはないからです。そして皆さんは、自分の一生をかけて取り組む大きな課題にいつか出会うかもしれません。

今年の7月に、東京で京都大学一稲盛財団合同京都賞シンポジウムが開かれました。テーマは「生命の神秘とバランス」で、青山学院大学の福岡伸一さん、京都大学の森和俊さん、大阪大学の長田重一さん、東京工業大学の大隅良典さんに講演をしていただきました。私が驚いたのは、これらの方々が様々な学問分野の出身でありながら、それぞれ異なるアプローチから生命の本質に迫っていることでした。大隅さんと長田さんは理学、森さんは薬学、福岡さんは農学の出身ですが、皆さん生命科学に目を開かれ、細胞の不思議な活動に取り組むことになります。大隅さんは細胞内でタンパク質を分解するオートファジーという現象を発見し、森さんはタンパク質を合成する小胞体の活動を明らかにしました。長田さんは、細胞自体が死んでいくアポトーシスという現象を解明しました。福岡さんはこうした細胞の絶え間ない分解と合成の作用を、熱力学第2法則に従わずにエントロピーを常に捨て続ける「動的平衡」として生命の本質を定義しています。さらに私が感銘を受けたのは、これほど素晴らしい発見を成し遂げた4人の方々が、まだ生命は解明されていないとして、その謎に挑み続けているということでした。真の研究者は、生涯の課題を決してあきらめることなく探求し続ける。その姿に私は強く心を打たれました。遺伝子組み換えやゲノム編集によって生物が大きく改変され、私たちの世界に人工知能やロボットが共存する時代を迎え、生命の本質を探ることはますます重要になっていると思います。

現代は不確定性の高い時代と言われます。情報通信機器が発達したおかげで、私たちはいつでもどこでも膨大な情報にたやすくアクセスできるようになりました。しかし、その反面、どれが信用できる情報なのか、判断しにくくなりました。歴史が新たに編纂しなおされ、解釈しなおされて、歴史上の人物の評価が目まぐるしく変わります。プラネタリーバウンダリーという概念が提唱され、その9つの条件のうちのいくつかが限界値を超えていると言われます。しかし、その数値をめぐって学者の間では意見が分かれます。地球温暖化の原因は大気中の二酸化炭素の割合が上昇したことだという事実が各国で共有される一方で、それとは異なる数値を示して温暖化は地球の気候変動の自然な変化だと述べ、パリ協定から離脱する大統領もいます。日本でも地震や津波に耐える基準や、原子力発電所の脆弱性、放射能による健康被害をめぐって、どのデータを用いるかで研究者の意見は分かれています。科学や技術が人間の安全や安心を保障できなくなっているのです。

それは、私たち現代人が高度な情報インフラに囲まれ



て暮らしているためでもあります。交通手段も建物も、食糧や水の供給に到るまで、複雑なネットワークのなかで電化され情報化されて維持されています。台風や地震などの災害で通信網や電気が停止すると途端に何もかも動かなくなることを、今年日本を襲った災害で私たちは身に染みて知っています。問題は、その情報システムの内容がわからないままに、私たちはその恩恵を享受しているということです。システムが停止しても、一般の人々にはその内容がわからないので、専門家が復旧してくれるまで不便に耐えなければなりません。しかも、原子力発電所の事故のように、システムが破壊されたことでどれほどの災禍を受けるか、確かなことは不明なままです。昔は安全・安心な環境は人の手で造られ、それが壊されても人の手で修復することができました。しかし、現代は人工的な環境が被害を過大にし、その修復は人知を超え、新たな技術の開発を必要とする時代です。人間が作り出した科学技術が人間をさらなる不安に陥れているのです。今こそ、すべての研究者が分野を超え、総力を挙げて、確かな未来を提示する必要性に迫られているのです。

*

本日学位を授与された論文の報告書に目を通してみると、京都大学らしい普遍的な現象に着目した多様で重厚な基礎研究が多いという印象とともに、近年の世界の動向を反映した内容が目にとまります。グローバル化にともなう異文化との交流、多文化共生、人の移動や物の流通、地球規模の気候変動や災害、社会の急激な変化にともなう法や経済の再考、心の病を含む多くの疾病に対する新しい治療法などです。

これらの論文は、現代世界で起こっている問題や、これまでに未解決であった問題に鋭い分析のメスを入れ、その解決へ向けて新たな証拠や提言を出すということと共通しています。確かな資料に基づく深い考察から発せられたこれらの提言は、未来へ向けての適切な道標となると思います。タイトルを見ただけでも中身を読んで詳



しく内容を知りたいという気持ちをかき立てる論文や、私の理解能力を超えたたくさんのすばらしい研究が学位論文として完成されており、私はその多様性に驚きの念を禁じませんでした。この多様性と創造性、先端性こそが、これからの世界を変える思想やイノベーションに結びついていくと確信しています。

現代の日本は世界の先進国に比べ研究力が落ちていると言われていました。とりわけ、分野を超えた対話が低調で、産業界ではイノベーションが起きないことが問題視されています。京都大学はその重苦しい空気を吹き飛ばして、時代の先端を走らねばなりません。それは、皆さんが今まで京都大学で培った能力を世界へ向けて発信することです。自分が発見した新しい事実や考えを世に出すためには、面白いと思う対象や現象を忍耐強く追い続け、それを発見に結び付ける静謐で自由な学問環境と、発見したものを論文として形にするための質の高い対話や討論が可能なコミュニティが必要です。京都大学はこれまで

その環境を維持することに全力を尽くしてきました。

ここに集った皆さんも、京都大学での研究生活を通じて、発見の喜びや論文に仕上げるまでの苦労を十分に味わってこられたことと思います。自分と同じ分野の仲間や他分野の仲間と、活発な対話を通じて、独自の考えや世界を作り上げたことでしょう。それは自由の学問の都、京都大学で学んだ証であり、皆さんの今後の生涯における、かけがえのない財産となるでしょう。また、皆さんの学位論文は、未来の世代へのこの上ない贈り物であり、皆さんの残す足跡は後に続く世代の目標となります。その価値は、皆さんが今後研究者としての誇りとリテラシーを守れるかどうかにかかっていると思います。昨今は科学者の不正が相次ぎ、社会から厳しい批判の目が寄せられています。皆さんが京都大学で培った研究者としての誇りと経験を活かして、どうか光り輝く人生を歩んでください。

本日は、まことにおめでとうございます。

2019年9月24日

令和元年度大学院秋季学位授与式 式辞

本日、京都大学から修士の学位を授与される108名の皆さん、修士(専門職)の学位を授与される9名の皆さん、博士の学位を授与される189名の皆さん、誠におめでとうございます。

学位を授与される皆さんの中には、164名の留学生が含まれています。累計すると、京都大学が授与した修士号は81,428名、修士号(専門職)は1,861名、法務博士号(専門職)は2,258名、博士号は45,039名となります。列席の理事、副学長、研究科長、学館長、学舎長、教育部長、博士課程教育リーディングプログラムコーディネーターをはじめとする教職員一同とともに、皆さんの学位取得を心よりお祝い申し上げます。

京都大学が授与する修士号や博士号には、博士(文学)のように、それぞれの学問分野が付記されており、合計23種類もあります。また、8年前からリーディング大学院プログラムが始まり、これを受講し修了された皆さんの学位記には、それが付記されています。これだけ多様な学問分野で皆さんが日夜切磋琢磨して能力を磨き、その高みへと上られたことを、私は心から誇りに思い、うれしく思います。本日の学位授与は皆さんのこれまでの努力の到達点であり、これからの人生の出発点でもあります。今日授けられた学位が、これから人生の道を切り

開いていく上で大きな助けとなることを期待しています。

*

世界は今、大きな文明の転換期を迎えようとしています。数百万年続いた狩猟採集社会、1万2千年前から始まった農耕牧畜社会、18世紀に起こった産業革命による工業社会、そして180年前の電信の発明から30年前のワールドワイドウェブの登場により生じた情報社会に私たちは生きており、その変化の波は急速に拡大しています。

半世紀前に大阪で開かれた万国博覧会の共通テーマは「人類の進歩と調和」でした。その年に京都大学に入学した私は、万博会場に足しげく通いながら、いったいこれからどんな未来が開けていくのだろうとワクワクしながらパピリオンをめぐったことを覚えています。アメリカ館では、その前年にアポロ計画によって月面着陸に成功し、宇宙飛行士が持ち帰った月の石が展示されていましたし、ソ連館でも世界最初の人工衛星打ち上げに象徴される宇宙開発の成果を謳っていました。三菱未来館では、超大型台風を制圧する「気象コントロール・ロケット隊」の活躍が映像で紹介され、自然と機械が調和する50年後の社会の未来図が示されていました。その象徴は何とんでもなく「太陽の塔」でしょう。外見は祭神を思わせる幻想的な造形で、中の空間には生物の進化を表す「生命

の樹」が枝を広げ、最上部には未来都市の模型が立ち並びます。まさに古代から未来へ至る生命の流れを象徴する塔でした。昨年三月から万博記念公園で一般公開されていますから、万博を経験されていない若い世代の方々も見ることができます。

さて、それから50年後の今日、あの万博で予想したような社会に私たちは生きていますでしょうか。たしかに、科学技術は急速な進歩を遂げ、とくに情報通信技術は予想をはるかに超えて人々をつなぐようになりました。物や人の動きは国境を超えて加速し、世界の動きはどこにいても手に取るようにわかる時代になりました。生命科学の成果や農業技術の進展により、栄養価が高く、安全で収量の多い栽培植物や、成長が早く美味しい肉や魚の量産ができるようになりました。医療技術の発展により、病気の早期診断や新しい薬の開発が進み、医療ロボットが的確で安全な手術を実施し始めています。自動運転を可能にするドライバーモニタリングシステムやスマートシティセンシング、カメラとAIを用いた商品識別技術、多言語自動翻訳技術、災害情報分析技術など、新しい技術が次々に実用化され、私たちの暮らしを大きく変えつつあります。しかし、現代の科学技術はまだ気候変動や自然災害を防止し、コントロールすることはできません。近年、世界中で大きな災害が頻発しています。日本でも、普賢岳や三宅島、桜島、口永良部島などの噴火、阪神淡路大震災、東日本大震災、熊本地震などの大地震、さらに台風や豪雨、豪雪による被害が毎年のように列島を直撃し、多数の死者を出し、居住環境や産業施設の崩壊をもたらしました。その復興には多大な労力と時間、資金を要し、多くの人々が財産や住宅を失って苦しむことになりました。とくに、2011年の東日本大震災は津波による被害で福島第一原子力発電所の炉心が溶融して、周辺地域に大規模な放射能汚染を引き起こしました。これは1979年の米国のスリーマイル島、1986年のソ連のチェルノブイリに匹敵する原子力発電所の重大事故であり、その放射能汚染が長期にわたって居住が制限される帰還困難区域を生み出し、人々に健康被害を引き起こ

すことがわかってきました。世界では原子力発電を見直す動きが広がり、日本でも多くの原子力発電所が停止して、その安全性について詳しい点検が行われています。

また、近年は世界で国家や政治の枠組みや国際関係の大きな変化があり、グローバリズムの進展が妨げられ、世界の調和が崩れようとしています。1989年のベルリンの壁崩壊に象徴されるように東西冷戦が終結し、世界は融和に向かうかに見えました。しかし、民族間、宗教間の対立は解消せず、世界各地で次々に大規模な武力衝突が起き、国が分裂し、新しい体制に組み替えられました。不特定多数の人々を標的にした新しいタイプのテロ活動が登場し、ドローンなどの遠隔操作が可能な兵器が使われるなど、人々を大きな不安に陥れています。さらに、気候変動や紛争の影響を受けて、大量の経済難民が国境を越えて流入し、その反発から排外主義が台頭し、核兵器や貿易をめぐる国際協定からの離脱、資源をめぐる覇権争いが激化するなど、多数の問題が浮上しています。

*

イスラエルの歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリは、3年前に『サピエンス全史』という本を出し、言語の登場に始まる認知革命によって宗教、国家、お金という虚構を作り出したことが、これまでの人類の繁栄につながったことを示しました。資本主義こそグローバルな視野と倫理体系を持ち、全世界を制覇した唯一の宗教であり、世界中の政府が経済成長という思想に取りつかれているというのです。そして、生命の本質がDNAであることが判明した今、生物も人間も生化学アルゴリズムやネットワークシステムの集合体とみなされるようになりました。「自由意志を持った個人」というヒューマニズムの前提が幻想であったとされ、これからは生命すらも情報の操作によって生み出されるデータイズムの時代と言われるようになったのです。昨年出版した『ホモ・デウス』という本で、ハラリはこう述べています。人間はこれまで苦しめられてきた飢餓、病気、戦争という大きな課題を20世紀の終わりまでにほぼ克服できる見通しを立てた。21世紀の人間が目指すのは、新たな3つの課題、すなわち神の手、不死、幸福だということです。たしかに、生命科学によって新しい生命を作り出すことに成功した人間は、神の手を持ったといえるかもしれません。遺伝子編集や生命工学によって人間の強靱さが拡大すれば、やがて不死の身体を手に入れることが可能になるかもしれません。人間の頭脳をそっくり人工知能に移し替えることができれば、脳死が人間の死とみなされている現状では、不死という判断が可能です。ただし、幸福だけは定義があいまいで、目標がはっきりせず、科学技術だけ



で達成できるかどうか定かではありません。幸福は個人的なものではなく、他者とのかかわりがその在り方に大きな影響をもたらすからです。

これから私たちは科学技術だけでなく、人間や社会の在り方をしっかりと見つめ、自然と文化の調和がとれた世界を構築していかなければなりません。情報通信技術 (ICT) が縦横に張り巡らされ、物がインターネットで繋がれる (IoT) 時代です。大量の情報が人工知能 (AI) によって分析され、効率の良い暮らしが可能になります。これまでのように資源や物質ではなく、知識を共有し集約することで様々な社会的課題を解決し、新たな価値が生まれる「知識集約型社会」が到来します。経済も人の動きもより活発になり、分散や循環が社会や産業を動かす力となります。そういう未来社会では、多様性や創造性のほかに、グローバルな倫理観に基づく自己決定力や調整能力が必要とされるでしょう。今後の地球や社会の変動を確実に予測することは難しいと思います。しかし、プラネタリー・バウンダリーで警告されているように、人口が増え、人為的影響が加速する現代の状況を続けていけば、温暖化によって自然災害が頻発し、汚染が進んで人間の住める環境が減少し続けることは目に見えています。パリ協定に基づいて立てた各国の達成目標を確実に実行し、SDGs を世界共通の課題として解決を目指していくことが不可欠になります。これからのみなさんの活躍が地球や人間の将来を大きく動かしていくのです。

*

本日学位を授与された論文の報告書に目を通してみると、京都大学らしい傾向が見えてきました。多様で重厚な基礎研究が多いという印象とともに、近年の世界の動向を反映した内容が目にとまります。グローバル化ともなう異文化との交流、多文化共生、人の移動や物の流通、地球規模の気候変動や災害、社会の急激な変化ともなう政治や経済の再編、心の病を含む多くの疾病に対する新しい治療法などです。これらの論文は、現代世界で起こっている社会問題や、これまでに未解決であった諸課題に鋭い分析のメスを入れ、その解決へ向けて新たな証拠や提言を示すということで共通しています。確かなデータに基づく深い考察から発せられたこれらの知見は、未来へ向けての適切な道標となると思います。タイトルを見ただけでも、詳しく内容を知りたいという気持ちをかき立てられる論文や、私の理解能力を超えるような新しい研究が学位論文として完成されており、私はその多様性に驚きの念を禁じえませんでした。この多様性と創造性、先端性こそが、これからの世界を変える思想文化や科学技術に結びついていくと確信しています。

今後、ICT技術の発展によりフィジカルな空間とヴァーチャルな空間の融合が顕著になるでしょう。大学はそれを人間に幸福をもたらすように調整するシンクタンクやコミュニティとしての役割を果たしていかなければなりません。AIとITは人間の道徳的な生活にも浸透してくるでしょうが、芸術や人間の感性が科学技術の行き過ぎを押しとどめる最後の防波堤となることは否定できません。私たちは今豊かな情報に恵まれながらも、個人が孤独で危険に向き合う不安な社会に生きています。仲間と分かち合う幸せな時間はAIには作れません。それは身体に根差したものであり、効率化とは真逆なものだと私は思います。情報には感性がなく、目的に沿っていかようにでも作り変えることができます。情報には高い利便性がありますが、それは人間の身のたけに合ったものではありません。ですから私たちは、身体性に根ざした幸福感を賢く組み込むような「超スマート社会」を構想する必要があります。それには文理の境界を越えた深い教養と時空を自在に往還する幅広い知識が不可欠になります。

本日、学位を授与されるみなさんは京都大学で培った高い能力を駆使して、ぜひこの困難な時代に叡智の花を咲かせてほしいと思います。学問をするには、その時代への感性を持つことが重要です。くわえて、どんな学問を取めるにも幅広い教養と基礎が必要です。未知の領域や新しい課題を発見する力は、小さいころに自然に遊んだ経験や、異分野で培った見識が育ててくれることがあるのです。しかし、今や世界中で科学に向き合う姿勢が画一化され、とくに技術と結びついて、社会にすぐに役立つイノベーションのみが求められる風潮にあります。自分の学問分野だけでなく、他の分野の知識や芸術的な感性を幅広く取り入れて、それぞれの研究者が独自の科学的直観を持つことが重要だと思います。

ここに集った皆さんも、京都大学での研究生活を通じて、他の分野に広く目を向け、活発な対話を通じて、独自のアカデミックな世界を作り上げたことでしょう。それは京都大学で学んだ証であり、皆さんの今後の生涯における、かけがえない財産となるでしょう。また、皆さんの学位論文は、未来の世代へのこの上ない贈り物であり、皆さんの残す足跡は後に続く世代の目標となります。その価値は、皆さんが京都大学の卒業生としての誇りを守れるかどうかにかかっていると思います。たいへん残念なことです。昨今は科学者の不正が相次ぎ、社会から厳しい批判の目が研究者に向けられています。皆さんが京都大学で培った研究者としての誇りと経験を活かして、どうか光り輝く人生を歩んでください。

本日は、まことにおめでとうございます。

山極総長の言葉 学外での活動

トヨタ財団広報誌「JOINT」No.25 2017年10月 2～3頁

大学はジャングル

長らくアフリカの中央部で野生のゴリラの調査を行ってきたので、ゴリラの目から人間社会を眺める習慣が身についてしまった。大学の総長に就任してもうすぐ3年になるが、ゴリラの目から見ると大学はジャングルのようなものだと思う。

ジャングル、すなわち熱帯雨林は地上で最も生物多様性の高い場所である。多種多様な植物、昆虫、爬虫類、鳥類、そして哺乳動物が共存している。年中どこかで色とりどりの花が咲き、おいしそうなフルーツがなつて、動物たちを引きつける。昼には色鮮やかな蝶や鳥たちが舞い飛び、夜にはカエルや虫たちの合唱が響きにこだまする。

人間に系統的に近いサルや類人猿もその仲間である。サルたちの種類は赤道直下の熱帯雨林に最も多く、緯度が高くなるにしたがって少なくなるし、それぞれの種の分布域が広がる。これは、熱帯雨林の真ん中では新しい種類のサルが誕生していて、たくさんのサルたちがひしめき合って分布域を広げられないでいることを示している。そのなかで新しい特徴を獲得した種がジャングルを離れ、新天地へと旅立っていくのだ。人間もそうした、進取の気性を備えた種の一つだったに違いない。

これらの膨大な数の植物や動物たちは、互いのことをよく知っているわけではない。密接な関係を保っている種もあるが、全く関係を持たず、出会ったこともない種もたくさんいる。しかし、ジャングルは一つの生態系として安定を保っている。大木が倒れたり、外からたくさんの渡り鳥がやってきたとしても、すみやかにその変化は修正され、調和と安定を取りもどす。それは、ジャングルが豊潤な光と水に恵まれているからである。植物の生育に光と水は不可欠だ。その植物が提供する葉や果実や樹液を食べている植食動物たち、そしてその動物たちを食べる肉食動物たち、動物たちの排泄物や死骸を食べている分解動物たちが調和を保っているのがジャングルなのである。

そのジャングルのあり方に、京都大学のような総合大学はよく似ている。まず大学は多種多様な学問から成り立っている。京都大学には10学部、18大学院、35の

研究所や教育研究センターがあつて、3,000人も教員が日夜自分の学問分野で独自の考えに磨きをかけている。それぞれの教員はよく知り合つて共同研究をする間柄もあるが、全く会ったこともない人たちもたくさんいる。しかも、全く関係なさそうな学問でも、どこかで繋がつていて、ときとして予想もしなかつたような分野が結びつくことがある。例えば、それまで無縁だった発生学と医学が結びついてiPS細胞研究という新しい学問分野が生まれ、山中伸弥さんがノーベル賞を受賞するようなことが起こる。

そう、大学はジャングルと同じように常に新しい種、すなわち学問が生まれる場所なのである。それは、さまざまな学問が出会い、教員たちが自分の領域を超えて対話し、新しい考えを生み出そうとしているからだ。そして、新しく生まれた学問は大学を飛び出して、その能力を世界で試していく。京都大学が日本各地にたくさんの研究所やセンターを持っているのは、新しい学問の種子を発芽させようと努力してきた結果である。霊長類研究所や生存圏研究所、こころの未来研究センター、野生動物研究センターなど、新しい学問の気風に満ちあふれている。

そういった大学における多様性や調和を安定的に保とうとすれば、ジャングルの豊富な光と水に匹敵するものが必要である。それは世論とお金だ。京都大学には毎年5,000人近い学生が入学してくる。高校を卒業したばかりの学生もいれば、他の大学で学び、高度な学問を学ぼうと大学院に入学してくる学生もいる。それぞれに大きな期待を京都大学に抱いているし、自分が将来活躍する姿を夢に描いている。そして、大学卒業後に彼らを受け入れる産業界や省庁などさまざまな組織も、大学で彼らが身に付けてくる能力に高い関心を示す。さらに、イノベーションの創出を目指している企業や、たくさんの課題を抱えている自治体なども、大学で新しい発想や解決策が得られることを期待している。これらの期待や大学に対する信頼があつて、多くの優秀な学生が入ってきてくれるのである。



その期待に応えるためには、最先端の学問を実施できる環境と世界で活躍する高度な知識と技術を持った研究者を擁しておかねばならない。科学技術はどんどん刷新されるので、それにともない設備や装置は最新のものに入れ替える必要があるし、新しい知識や考えを持つ研究者の交流の場を用意しなくてはならない。そのための設備費や研究費は膨大な額に上り、電光熱費や電子ジャーナル購読費など必要経費は年々増加している。ところが、国から支給される運営費交付金は年々削減されている。これからは、寄附や産業界からの投資を促進して大学の

自己資金を増やして行くことが不可欠になる。

地球規模の気候変動や環境汚染によって、ジャングルは崩壊の危機にある。同じようにグローバルな世界の動きと財政難によって大学も存亡の危機にある。新しい種とイノベーションを創出する源泉を今支えなければ、地球の未来も日本の将来もしぼんでしまうのではないだろうか。大学の総長はそのフィクサーであり、知の猛獣たちに力を発揮させる仕掛け人である。ぜひ、大学という生態系を維持すべく努力したいと思う。

国立大学協会 70 周年記念誌 (2021 年 3 月発行)

国立大学の新しい在り方を問う時代

京都大学の学長に就任後、1 年も経たないうちに里見進会長の下で副会長を 2 年、引き続き会長を 2 年、合計 4 年を国大協の執行部で務めさせていただいた。おまけに会長職の間に日本学術会議の会長も兼任して 3 足のわらじを履いたので、どれひとつ精力を集中できなかったように思う。ここに記してお詫びを申し上げたいと思う。ただ、どの組織も理事や副会長の方々が大変有能で、自ら旗を振っていただけたことは私にとって幸運であった。また、日本学術会議はもとより、総合科学技術・イノベーション会議 (CSTI) など数々の委員会に参加し、違う立場から国立大学を支えることができたのも私にとっては大きな力になった。これらの機会を通じて、学術の在り方や大学の運営について多くを学んだように思う。

私が執行部に関わった時代は、一言でいえば国立大学の分類と差別化が進み、経営体としての組織改革が強化されていく転換点だった。2015 年 6 月に下村博文文科大臣による「教員養成系・文系学部・大学院の廃止、転換」要請に始まり、文科省は国立大学を「地域のニーズに応える人材育成・研究を推進する大学」、「分野毎の優れた教育研究拠点やネットワークの形成を推進する大学」、「世界トップ大学と伍して卓越した教育研究を推進する大学」という 3 つの枠組みに分類。運営費交付金を毎年 1 ~ 1.6% 削減して、それぞれの枠組みに応じた KPI を出させ、評価に応じて機能強化経費を競争的に配分することとした。私が会長職を担ってからは、運営費交付金の約 1 割を共通指標に基づき傾斜配分することになり、各大学がその指標に基づく成果を上げることに注力しなければならなくなった。経営協議会の外部委員規定、教

育研究評議会の役割、学長の権限強化を盛り込んだ国立大学法人法の改正、年俸制を推進する制度改革、指定国立大学法人制度、国立大学法人ガバナンス・コードの制定など、多くの動きがあった。さらに、18 歳人口の減少によって大学の入学定員を減じることが文科省から提案され、各大学が定員の変更を含めて将来像を描き、文科省と個別に対話することになった。だんだん国大協が一枚岩ではなくなるとの懸念が強まっている。

この間、さまざまな委員会が政府の下に立ち上がり、大学改革を議論した。経済財政諮問会議、未来投資会議、人生 100 年時代構想会議、まち・ひと・しごと創生会議、中央教育審議会、CSTI、産官学による大学支援フォーラム (PEAKS) などである。財務省も財政制度審議会でも大学改革を焦点にした議論を展開し、文科省に国立大学改革の急展開を迫った。ここでの議論を概観すると、日本の産業界はイノベーションが起きなくなり、ユニコーン企業も少なく、世界から周回遅れとなっている。この原因は研究力の低下にある。とりわけ、論文数などの研究力の指標から判断すると、これまで日本の研究力を担ってきた国立大学の力が低下している。それは、国立大学が産業界と連携せずに基礎研究ばかりを重視し、応用研究や技術・製品開発から目を背けてきたことが原因である。この劣後状態を打開するためには大学の経営力を強化して産学連携を促進することが不可欠であり、大学を運営重視から経営重視に作り替えねばならない。そして改革の焦点は、日本の研究力の中心を担い、多くの税金を投入している国立大学になる。国として最も改革の手を入れやすい対象であるからだ。

しかし、この論理はおかしい。そもそも大学との連携を拒んできたのは産業界なのだ。しかも、産業界が世界の周回遅れになったのは企業の経営方針の失敗にある。20世紀の前半、ヨーロッパと米国は企業がリニアモデルを採用して成果を上げていた。リニアモデルとは基礎研究から応用研究、技術開発、製品開発・販売、市場の拡大に至るまで一つの企業が担う方針で、米国を中心に大企業が次々に採用して基礎研究に多額の資金を投じた。しかし、やがて基礎研究があまり製品開発に結び付かないことを悟った米国の産業界はリニアモデルを放棄し、中央研究所を次々に廃止し始めた。そこで登場したのがシリコンバレーで、1970年代の初め頃から基礎研究や応用研究を小さな組織が分担してイノベーションを起こすようになった。スタンフォード大学はその核となり、大学発のベンチャーを続々と立ち上げて新しい発想や技術を大企業とつないだ。米国政府もそれを後押しすべく、1980年にバイドール法を発令して公的な資金による技術開発でも大学に特許権を与え、1982年にはSBIR(中小企業技術革新制度)を設けてベンチャーの育成を促進した。

ところが、日本は高度成長期にあつて米国を抜く勢いの経済成長を達成しつつあったため、企業は日本型の経営組織(一括採用、年功序列、終身雇用)とリニアモデルにこだわり続けた。このため大学を人材供給の場としか見なさず、学生の能力をほとんど問わずに大学のブランドで採用し、採用後の社員教育を通して産業界に適応させる方針を取ってきた。日本の企業が今もなお大学院教育を軽視し、せいぜい修士課程までの学生しか採用しようとしたくないのもこの時代の名残である。さらに日本はバブルの時代を迎え、欧米の企業が基礎研究を放棄したことを見て、将来の失敗につながる暴挙だと非難する企業が多かったという。しかし、1995年にバブルが崩壊し、日本の企業もその誤りに気付く。1996年には日本の企業が一斉に中央研究所を廃止し、企業の研究力がすぐに落ち始めた。当時、日本の理工系の研究者の4分の3は企業に属していたから、その負の影響は明らかであった。大学の学位取得者が行き場に困った事態を重く見て、文科省はポストク1万人計画を立てて、科学立国日本の将来を支えようとした。しかし、政府の対策は遅れ、1999年になって日本版SBIR制度と日本版バイドール制度が施行された。米国より実に20年も遅れている。しかも、日本のSBIR制度は中小企業の倒産を防ぐ効果はあったものの、ベンチャーの育成にはつながらなかった。さらに、政府は財政難により公的機関の民営化を加速し、2004年には国立大学が法人化された。衆院の附帯決議「国は、高

等教育の果たす役割の重要性に鑑み、国公私立全体を通じた高等教育に対する財政支出の充実に努めること」に反して運営費交付金の削減を毎年のように断行した。その結果、大学の研究力も落ち始めた。運営費交付金の削減によって人件費が削られ、教員の雑用が増えて、研究者の数と研究時間が減ったことが論文数の減少につながったことは明らかである。

これらの歴史を総括すれば、1970年代から続いた産業界の経営改革の遅れが世界からの劣後を招き、それが若い研究者のポストを奪い、政府のベンチャー育成の政策の遅れと失敗、それに大学改革の方針の誤りが大学の研究力をも落とす原因となったと言える。大学だけにイノベーションの欠落と研究力の低下の責任を押し付けるのは大きな間違いなのである。もちろん、大学側に責任がなかったとは言えない。戦後長らく大学は基礎研究に重点を置きすぎ、産学連携を嫌い、論文を書くことばかりを教員の業績と見なしてきた。欧米のように、産業界で研究者が活躍できるルートを自ら開拓する努力を怠ってきたことも事実である。1991年の大綱化によって教養教育が軽視され、大学院重点化によって教員が学部教育よりも大学院教育に熱意を傾け、その結果として狭い専門の学問に閉じこもってきた傾向がないとは言えない。しかし、この反省はすでに1990年代から始まっており、各大学では教養・基礎教育を再編して、学生が学びやすいように履修コースを整理し、アクティブラーニングやキャップ制を導入するなど多くの工夫を重ねている。そういった改善の努力を検証もせず、産業界と政府が一斉に国立大学改革に声を張り上げるのは本末転倒としか言いようがない。

財務省や文科省から改革の圧力が強まる中、私は永田恭介副会長(筑波大学)に座長をお願いして、2019年1月に「高等教育における国立大学の将来像」をまとめた。ガバナンス改革、人事給与改革、産官学推進による共同研究推進のために3つのWGを立ち上げて、それぞれ永田副会長、松尾清一副会長(名古屋大学)に座長を務めていただいた。また、大きな課題である男女共同参画と広報については室伏きみ子副会長(お茶の水女子大学)、さらに長年の課題であった入試における記述式問題導入については岡正朗副会長(山口大学)をお願いした。いずれも困難な課題であり、国立大学の個性を失いかねない危機にあつてはぶんご苦労されたと思う。広報では全国知事たちの支援や、地方での取り組みを多く取り上げていただいた。財務省の強引な改革案とかなり偏向の強い統計資料に対しては、国大協の木谷雅人常務理事や山本健慈専務理事を中心に正しいデータを出して立ち向かっ

ていただいた。おかげで何とか国立大学の自律原則に踏みとどまれたと感謝している。

国大協の支援には、自民党と公明党による国立大学(後に国公立大学) 振興議員連盟を結成していただき、財務省に対して財政支援や税制改革を強く訴えていただいた。大変ありがたく思っているが、なかなか財務省には響かず、切羽詰まった気持ちでいたところ、議員の方から「もうムシロ旗を立てて国会を取り巻くしかないんじゃないか」と言われた。その言葉に背中を押された私は、続いて議員連盟と財務省に陳情に行った際、神田眞人次長とぶつかってつい声を荒げてしまった。ちょうどそこにいた新聞記者にその場面が取り上げられ、報道されて話題になった。それがきっかけとなって読売新聞の異見公論の連載が始まり、大学人、官僚、産業人など多彩な顔触れが登場して大学改革を論じることになった。私は第1回目で、かなり語気荒く論じたことになっている。少し、言い過ぎたかと思うが、大学改革の危うさと実態が社会に伝えられた意義はあったように思う。

CSTIでも大学改革は大きな焦点になり、私は日本学術会議の総力を結集して科学技術政策への人文・社会科学の導入、基礎研究の重要性、若手研究者や女性研究者の支援を訴えてきた。それが功を奏して文科省や内閣府の政策に反映しつつある。また、経団連と国公立大学との間で始まった「採用と大学教育の未来に関する産学協議会」も山口宏樹埼玉大学長に大学側の座長になって

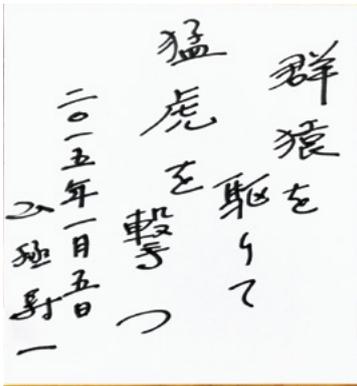
いただき、この3月に報告書を取りまとめた。産業界と大学の軋轢が解消し、双方が納得し合って明るい未来のために人材育成に協力する道が開けたと思う。

国立大学は変わらねばならない。しかし、それは同時に産業界や政府の方針の変化を伴わねばならない。国大協で学んだのは、官僚は過去を絶対に反省しないということだ。大学改革について、財務省は銀行の合併を、文科省は小中学校の統廃合をモデルにしている。いずれもスケールメリットと効率性、生産性を重視する考えで、数値目標を立てて競わせ、厳格な評価に基づいて生産性の低い組織を削減していこうという方針である。しかし、大学という自律的な教育と研究の現場にはその考えはなじまない。これから不確定性の高まる時代で活躍する人材を育てるためには、均一な教育方針や近視眼的な研究目標ではいけない。自由で創造的な、そして深い思慮に富んだ包摂的な能力を育成するために、社会への出口を担う大学はどうしたらいいか、私たちは多様なステークホルダーと対話をしながら考えていく必要がある。今の官僚たちは政府に人事を握られ、保身に走って自由に発想を展開できていないように思う。政策を作るのは官僚であるが、私たちも率先して政策を提案し、未来の高等教育をいっしょに創らねばならない。このままでは日本は低学歴社会になる。広く社会に高等教育の重要性を訴えて、自律的で自由な発想のできる大学づくりを怠ってはならないと思う。

新年の抱負

仕事始めの日にしたためる「今年の一言」

2015年



群猿を駆りて猛虎を撃つ

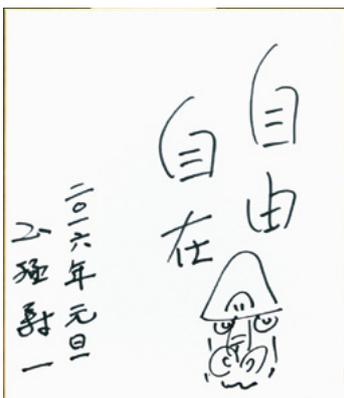
本日が本学の仕事始めということで、新年の抱負として今年の一言を書きました。

「群羊を駆って猛虎を攻む」という言葉がありますが、京都大学が有する、自由で独創的な発想や英知を結集して立ち向かえば、世界のどんな難局にも必ず解決策が見えるはず！という意味を込めました。

そんな気概をもって、教職員一同とともに頑張ってまいりますので、本年も京都大学をよろしくお祈りします。



2016年



自由自在

今年の一筆は、「自由自在」。(申年ですが、ゴリラのイラスト付き)

今年は申年です。古くからニホンザルは神の使いとされ、山岳信仰とともに畏怖の対象とされてきました。春になると山から下りてきて、田の神に山の神の便りを伝え、秋になると山へ戻っていく。

そんな自由自在で活発なサルのように、私たちも、京都大学の精神である「自由の学風」をさらに高め、研ぎ澄ましていこう、という気持ちを託してみました。

「自由の学風」とは、学生にとっては「学ぶ自由」、教員にとっては「教育する自由」や「研究する自由」を意味すると私は思います。

学生、教職員が、それぞれの自由を大いに満喫しながら、自由自在に、されど一致団結して夢のある明るい未来を築けるよう全力で頑張ってまいります。

火の鳥になっていざ

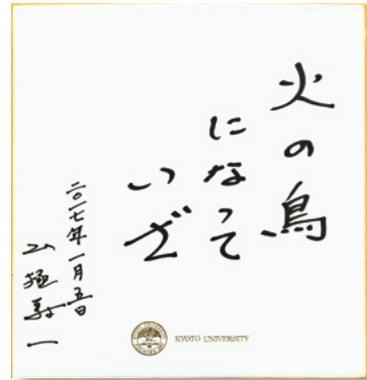
今年の干支は酉です。

アフリカの逸話によると、昔、鶏は森の中に住み、猛獣のヒョウも恐れるほど権勢を誇っていました。それは頭に火を燃やしていたからです。しかし、あるときヒョウの子どもが母親と一緒に、昼寝を決め込んでいる鶏にそうっと近づき、頭の炎に触れてみると、なんと冷たいときかでした。以来、森の動物たちは鶏を恐れなくなり、鶏はヒョウを怖がって人間のもとに身を寄せるようになったというのです。

今年は頭に本当の火を掲げた鶏になって野生をとりもどし、森の中に分け入ってみよう。京都大学の学生、研究者、教職員も野生に戻り、力強く飛躍しようという思いを込めました。

頭にかざした炎で世界を照らす、そんな火の鳥のような京都大学を目指します。

2017^年



賢く群れる

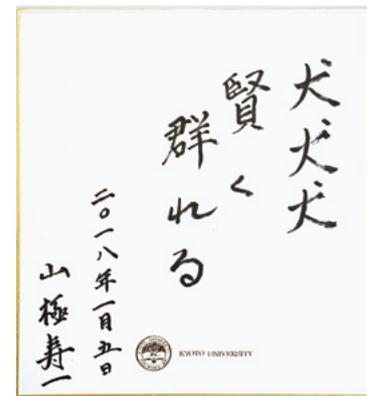
今年は戌年です。イヌと言えば、リーダーに忠実で上下の関係をよくわきまえて行動することが知られています。人間との付き合いも長く、忠実な友として人間圏の奥深くまで入って暮らしてきました。私が長らく調査してきたサルとは「犬猿の仲」と称されて相性が悪く、それは昔から野荒しをするサルをイヌによって追い払ってきたためだと考えられます。

イヌもサルも群れで暮らしますが、群れの作り方はまるで違います。イヌは、リーダーを中心に狩りをするために統率のとれた体制になっています。一方、植物食のサルは狩りをせず、あちこちに点在する果実や葉を効率よく安全に食べるために群れを作っています。食べる時には仲間と競合しないように分散し、休むときは安全を期すために集まります。人間は系統的にサルと近く、イヌのようにリーダーに忠実な統制のとれた集団を作るのは苦手なはずです。

さて、俗に「京大生は群れない」とよく言われますが、その真の意味は「京大生は自立独立の精神を持ち、仲間にもやみに迎合しない」ということだと私は思っています。初代総長の木下廣治は「自重自敬」という言葉を残し、自らを重んずる心は互いに尊重しあう心に通じることを説いています。これは「対話を根幹とした自由の学風」という本学の伝統的な精神風土を生み出しました。むしろ、京大生は「闊達な対話を通じて、他者に頼らない自由な発想を磨くために集まる」ことを好むはずなのです。

私たち大学で働く教職員も、それぞれの強みや個性を尊重しながら、喜びも苦労も分かち合い、同じ目的に向かって一緒に歩んでいきたいと思えます。

2018^年



2019年



猪突猛進を止める

今年は亥年であります。猪と言えば猪突猛進という言葉がすぐ頭に浮かべられると思いますが、私はこの猪突猛進を止めるというのを今年の合言葉にしたいと思っています。

昨年から、非常に大学改革の動きが早くなってきており、私は今年が大学改革の本丸になるのではないかと考えています。

しかし、京都大学はこの動きの中で我武者羅に走るのではなく、きちんと腰を据え、先を見て地道な改革をしながら、この激動の世の中でしっかりと自立し未来を支えていける人材を育てるということを大きな目標にしなければなりません。

そのためにやはり教職員一同心を一つにして、長い道りをきちんと見据えながら、しっかりした計画をたてていかなければならないと思います。

昨年、本庶佑 高等研究院副院長・特別教授がノーベル生理学・医学賞を受賞しました。これは科学研究費の増額や国際的な評価につながる日本、ひいては世界に多大な影響を与える結果になりました。

本庶副院長・特別教授の尽力もさることながら、教職員が一丸となって地道ながら進めてきた結果、結びついた大きな力であると私は考えます。

最後に、私の任期ももう2年を割りましたので、この2年弱の間にどれだけ次の世代にきちんと京都大学という大きな財産をつなげるかということ、もう一つの目標にしていきたいと思っています。

2020年



小さき命を遊ばせる

今年は子年であります。ねずみは非常に小さな存在ですが、繁殖力が高くどこにでも姿を現し、この世でインパクトが強い存在とも言えます。そういった「小さき命を遊ばせ」ながら、大きなインパクトを世界に与えていこうというのが今年のテーマです。

さて、京都大学は「自由の学風」そして「自由な対話」を尊重するなかで、創造の精神を育んできました。今は自由を謳歌するだけでなく、社会に対して説明責任を負う時代であり、様々な倫理上の責任が大学にはあります。しかし、規制を厳しくして監視するのではなく、互いに励まし合い、情報を交換し合って間違いを犯さないように予防することが大切です。

昨年の吉野彰先生、一昨年の本庶佑先生のノーベル賞受賞をはじめ、京都大学は今、世界に冠たる存在として注目を浴びる存在になりつつあります。私たち自身が世界を先導するという自負を持って、襟を正していかなければなりません。そして、世界の情勢を見つめ、他の多くの機関と連携し、大学の将来を見据えながら、歩んでいかなければなりません。

あと2年と少しで京都大学は125周年を迎えます。昨年、それに向けて「京大力、新輝点。」という新たな標語を考えました。この「輝点」には「起点」および「機転」という2つの意味も込められています。ねずみのように点は小さいけれど、磨けば輝き、集まれば大きな力を発揮します。

知の拠点として、そして様々な創造性を育むキャンパスとして、日本の先端、そして世界の先端を歩まなければならないということを肝に銘じて、これからも京都大学を盛り立てていきたいと思っています。